

親・子・カルトのトライアッド 信者と家族と教団のソシオン・ネットワーク分析

木村 洋二 ・ 渡邊 太

Triads of a Believer, his/her Parents and the Cult Religion : On the Mechanism of Conversion in terms of the Network Dynamics of Socion

Yohji G. KIMURA Futoshi WATANABE

Abstract

The concept of "socion" denotes a person or a group as a functional knot (socio-neuron) of the social network system. Socion-network is composed of looping circuits of "semio-weights" which assumed to be cathected as positive or negative "expect-potential". Socion communication system has multi-layered structure of "enfolding" and "unfolding" due to the feedback mechanism of looking glass.

This paper is to analyze the socion network dynamics of the cult religion and the family. We explained the recruiting system of cult ("irremovable points accumulative system") in terms of "shadow" concept, and then we focused on triad of a believer, his/her parents and the cult so that we could elucidate "trion" (enfolding triad) dynamics in the case study of Moonies' career from conversion to apostasy. In the case study, we found the sociological importance of "fourth socion" which could intervene in trion.

Key Words: cult, socion, semio-weight, communication, network, shadow, devotion, salvation, irremovable points accumulative system, trion, fourth socion, socio-bridge, mind control

抄 録

「ソシオン」は、社会ネットワークの結び目としての個人ないしは集団を指す概念である。ソシオン・ネットワークは、デキゴトに対する正負の「予期ポテンシャル」である「荷重」の還流回路からなる。ソシオン・コミュニケーション・システムは、鏡像帰還メカニズムによる「くり込み」と「くり出し」の多重交叉構造として構成されている。

本稿は、ソシオン理論によるカルト分析の試みである。シャドー概念によってカルトの入信勧誘システム（「帰還不能点累積システム」）を説明し、さらに親・子・カルトのトライアッドに焦点を合わせて統一教会信者の入信・脱会の事例研究から、「トリオン」（くり込まれたトライアッド）のダイナミクスをあきらかにした。カルトのソシオン・ネットワーク分析の結果は、「トリオン」に介入する第4項「フォース・ソシオン」の社会学的重要性を示している。

キーワード：カルト、ソシオン、荷重、コミュニケーション、ネットワーク、シャドー、献身、救済、帰還不能点累積システム、トリオン、フォース・ソシオン、ソシオ・ブリッジ、マインド・コントロール

0 ソシオン・ネットワークと意味世界の理論に向けて

ひとりの兵士が命と引きかえても守ろうとする一枚の布切れとはいったい何なのか、という問いは社会学の創立者のひとりであるエミール・デュルケーム [Durkheim 1912 = 1975] の根本問題であった。

われわれのソシオン理論の仮定によれば、1) 直列結合による媒介増幅と、2) 並列結合における共鳴励起、それに3) PN震動増幅の3つの増幅メカニズムの相乗によって誕生した超越荷重体を中心に、ソシオネットは一種の免疫機能を発動しながら、自他を識別する閉じたネットワーク、ソシオス (socios) を形成する。個々人の参入離脱を超えてソシオスの中心に燦然と輝く超越荷重体の象徴が、兵士が守ろうとした泥まみれの「軍旗」であり、信者が崇拝・擁護しようとする聖なる「書物」や「教義」である、と考えられる。

しばしば「神」や「革命」、「真理」や「樂園」といった言葉で指し示されるその超越的な純粹荷重は、M・ウェーバー [Weber 1921 = 1968] も指摘するように、「目的合理性」を逸脱もしくは超越するという側面をもつとはいえ、単なる妄想でももちろん狂気でもない。それは、ネットワーク上にコミュニケーションによって誕生するこの上なくリアルなポテンシャルであり、「至高」の在ル者 [Bataille 1976 = 1985]、在ルべき者に対する「恐れ」であり、超越への「希望」である。

自他の差異を溶解し、すべての人が充ちてアルどこにもない場所、つまり「ユートピア」(u-topia)へと人間を誘い駆りたてるその力は、「いま・ここ」を超えた「いつか・どこか」へ向かって歴史を駆動する主要な動因となってきたが、同時に、「存在しえないもの」に自他の財産や生命さえも差し出すことを要求する危険な魔力でもあった。

本論文では、そのような超越荷重が日常的なかからどのようなネットワークのメカニズムによって発生していくのか、カルトとよばれる宗教的な閉鎖集団への参入と脱退をめぐる実証的な知見に照らしながら整理・検討してみたい。ソシオン理論、とくにトリオン・モデルの仮定するいくつかの力学が複合して作動したとき、人間はそれなりに明晰な思考と真摯な感情のもとで、あるカルトの信者になり、さらにますますその虜になることが、合理的に説明可能であり、したがって内在的に理解可能であることがあきらかにされるだろう¹⁾。

1)「カルト」の信者と家族のネットワークは、信仰と救済による世俗の超越を目指してソシオスを形成しては破壊しつつ文明への道を刻んできた人類史の流れによく似た小さな早瀬のなかで足をとられている、といえるかもしれない。本稿は、あるカルトへの入信と脱会をめぐる元信者と家族のネットワークについての渡邊の参与観察研究がベースになっており、木村のトリオン・モデルに触発された渡邊が主に構想・執筆したものである。関係について思考する道具であるとするソシオン理論が実証的なデータの前に、どの程度有効な説明力をもつかを打診する格好の検証作業となるであろう。

1 カルトの精神

1.1 分析の道具としてのソシオン理論

ソシオン理論によるカルト現象の分析を試みる。これまで一般理論として展開されてきたソシオン理論を分析道具として、カルト宗教の個別事例に適用する。この試みにより、ソシオン理論の科学としての妥当性・応用可能性を検証することになる。「荷重オペレーション」「シャドー」「トリオン」といったソシオン理論の基礎概念の有効性を検証するだけでなく、「ソシオグラフ」を用いたモノグラフ的記述の有効性も、本稿のなかであきらかにされるだろう。また、ケース・スタディからのフィードバックにより、新たな理論的展開も期待できるはずである。

以下では、まずソシオン理論を理解するために最小限必要な解説を示した上で、カルトの集団構成、カルトの入信勧誘システム、カルトのネットワーク分析という順序で議論をすすめていく。

1.2 ソシオン理論の応用についてのメモ

カルト宗教の分析にソシオン理論を応用する際に、鍵となる概念のいくつかを簡単に紹介しておく。ここでは、ソシオン理論全体の体系的記述ではなく、本稿のカルト分析を読む上での手助けになるよう、大ざっぱにソシオン理論のイメージが把握できれば十分である。

ソシオンとは、社会ネットワークの結び目としての人間あるいは集団を指す概念である。ソシオン間でやりとりされる(と表現できる)荷重の還流が社会ネットワークを構成する。荷重とは、人が自分自身や他者、出来事に対して構成・賦与する、プラス・マイナスの重みづけをもった予期ポテンシャルのことである。「『信-不信』『好き-嫌い』のように正負の分極性をもつアナログ量で、デキゴトに対する予期ポテンシャル」[木村1993:2]と定義される荷重は、フロイトのいう「リビドー」(心的エネルギー)とその「備給(cathexis)」という概念に近いもので、大脳神経系における伝達物質やインパルスの量あるいはパターンとして、神経生理学的な対応物をもつはずのポテンシャルと考えられる。

ソシオン理論では、社会システムの基本単位は、荷重(予期ポテンシャル)の循環によって生まれる超個体的な環=ループと考える。ソシオン理論を感覚的に把握するためには、ユニット間で荷重が還流してループを形成している、というイメージを具体的に思い浮かべることがポイントになる。つぎのような喩えがわかりやすい。

たとえば、AとBがキャッチボールをしているとしよう。このとき、慎重にボールを選んで投げたり受けたりしているばあい、はじめにAとBがいて、お互いにボール投げをしている、というのは正しい。しかし、このボールのやりとりがどんどん早くなったとしたらどうだろうか？ キャッチボールがあつてふたりを使っている、ように見えはしないだろうか？ 実際、ボールの超個体的環運動があつて、これがたまたまAとBを活用していると考えても何の問題も生じない。BとCが交代した場合、やはりキャッチボールのループは多少軌道を変えながら途絶えずに回るからである。[木村 2000:129]

リアリティは荷重のループとして生成する。ソシオンの記述では、「ループ」「循環」「還流」「回路」「環」「まわる」といった回転運動を表すメタファーがよく使われるが、このキャッチボールの喩えを思い浮かべると理解しやすい²⁾。

もうひとつ重要なのは、鏡像帰還によるソシオンの「くり込み」「くり出し」の概念である。「くり込み」とは、対象を情動的にとり込み、可能態も含んだ内部モデルを構成することである。「くり出し」とは、とり込んだ表象イメージによる身体図式の駆動である。「くり込み」「くり出し」は、精神分析の「摂り入れ」「投射」にほぼ重なる[木村 1999:70]。鏡像帰還による「くり込み」「くり出し」が、ネットワークの運動を促す。

ソシオンは、たがいに鏡像をかざし、また取り込みながら、一定の自由度をもって荷重コミュニケーションを媒介し、社会ネットワークにおけるシステム・ダイナミクスを生成する。[木村 1999:66]

ソシオン・ネットワークは、階層性をもつ多重交叉構造からなる。実際の行為・出来事のレベル(第1階層)でのソシオンをオブジェクト・ソシオン(オブソシオン)と呼ぶ。客観的実体的存在としてのオブソシオンを鏡像帰還コミュニケーションによって、主観的意味世界に構成したものが、第2階層の表象と荷重からなるサブジェクト・ソシオン(サブソシオン)である。オブソシオンとサブソシオンは、デキゴトを表象に内在化する「くり込み」と、表象をデキゴトへ外在化する「くり出し」によって結ばれる。この2階層システムは、さらにもう1段階の「くり込み」によって、第3階層のメタソシオンを構成する。メタソシオンは、記号を要素として構成されるもので、「思考」を可能にする。ソシオン・ネットワークは、3階層間の多重交叉システムとして成り立つ。

2) ただし、荷重のループとして何か実体的な「エネルギーのようなもの」の移動が意味されているわけではない。木村はつぎのように説明する。「ソシオンのチャンネルを実際に移動するのは、媒体によって搬送される一種の『情報』であり、この情報の解読に連動して予期ポテンシャルに発生した荷重の変動分を、AB間でその量に相当する『荷重』が移動した、と便宜的に表現するだけである」[木村 2000:117]

厳密な議論は木村論文 [1993;1995a;1995b;1996;1999;2000] を参照してもらおうとして、おおよそ、以上の2点、すなわち荷重のループがリアリティを生むというイメージと、「くり込み」「くり出し」によって展開する3階層間の多重交叉構造を感覚的にとらえると、以下のカルト分析が読みやすい。

1.3 今日のカルト現象

南米ガイアナで900人以上が集団自殺した人民寺院(1978年)、テキサス州ウェイコーでFBIとの銃撃戦の末に建物ごと爆破炎上したブランチ・ダビディアン(1993年)、スイスで集団自殺した太陽寺院(1994年)、ヘールポップ彗星の接近に合わせてカリフォルニア州サンタフェで集団自殺したUFOカルトのヘヴンズ・ゲイト(1997年)など、カルト宗教は、しばしば衝撃的な事件によって、世間の注目を集めてきた。日本でも、一連のオウム真理教事件以降、社会問題としてのカルト宗教現象への関心が高まっている。

アメリカでは1970年代以降、日本では主として1990年代以降に、新奇な宗教集団を指すために「カルト」という言葉が一般的に使われるようになった。一般的なカルトのイメージは、反社会的な思想をもち、ときには反社会的活動にも踏み出しかねない危険な宗教集団というものである。

宗教研究者の間では、マスメディアをはじめとして一般的にいうカルトの用法と、学術概念としてのカルトの用法(たとえば教団類型論におけるチャーチ、セクト、カルトといった使い方)との間にズレがあることから、カルト概念をめぐる論争と混乱が巻き起こった³⁾。カルト(cult)の語源は、ラテン語のcultusで、特定の事物・人物への崇拝や宗教儀礼を意味する。つまり、本来カルトとは宗教そのものを指す言葉だった。デュルケームが、「宗教のなかにある永遠なるものはculte(礼拝)とfoi(信仰)である」[Durkheim 1912=1994:615]と述べたのもこの意味である。

しかし、今日の一般的な用法としては、社会的事件を引き起こすような反社会的な宗教集団や、何となくいかがわしそうに見える宗教に対してカルトというラベルが貼られる。また、宗教だけでなく、自己啓発セミナーやマルチ商法などさまざまな集団がカルトとして糾弾される。カルト研究者のシンガーとラリックは、「カルトのなかには愛馬カルト、宇

3) ベインブリッジも指摘するとおり、トレルチの古典的定義を端緒とする教団類型論は、ヨーロッパの特定の歴史的期間の記述としては有効であるとしても、あらゆる宗教を普遍的に説明する概念とはいえない。政教分離を原則とする社会では、公認された宗教(エクレシア)としてのチャーチは存在しないし、セクトとカルトの概念上の区別も容易ではない[Bainbridge 1997:23-25,39-40]。宗教研究におけるカルト概念を整理分類した井門富士夫も、要するに、カトリックとプロテスタント諸派の枠内におさまりきらない宗教運動を英語圏の社会でcult(フランスではsecte、ドイツではSectenまたはJugendreligion)と呼ぶと結論づけている[井門 1997:70]

宙カルト、スポーツ・カルト、音楽キャンプ・カルト、ダイエット・カルト、それに美容カルトまであるのだ」[Singer and Lalich 1995 = 1995:17]という。それらの集団をカルトとして一括して定義するためには、何らかの内的基準を明確化する必要があるだろう。

カルトを定義する試みは、宗教学者や心理学者、反カルト運動家らによってなされてきた。たとえば、アメリカのキリスト教調査研究所（Christian Research Institute）は、特定の集団がカルト的かどうかを判断する6つの特徴をあげている。（1）指導者による聖典解釈への絶対的なコミットメント、（2）指導者は決して間違ったことをしないと信じている、（3）先行する啓示と矛盾する啓示への信仰、（4）私たちは終わりの時を生きているのだという強い信仰、（5）「私たち/彼ら」という心性、（6）集団の命令に従わせる圧力。

しかしながら、これらの項目は危険なカルトを見分けるための客観的基準として十分とはいえない。創唱宗教の普遍的特徴に当てはまってしまふからである⁴⁾。この基準について、テイバーとギャラガーは、「たいそう皮肉なことに、これら6つの項目は、イエスとその弟子たちをととても正確に記述しているのである」[Tabor and Gallagher 1995:153]と指摘する。カルト批判者は、カルトにおける指導者への絶対的コミットメントや真理を疑わない姿勢を糾弾するが、よく考えるとこの基準は求道的な集団すべてに当てはまってしまふ。テイバーらが指摘するとおり、キリスト教調査研究所が作ったカルトの基準が、イエスと弟子たちの集団に当てはまってしまふのはじつに皮肉なことである。

カルトと呼ばれる教団は実際には多様であり、一括りにカルトとして特徴づけられるような範疇は成り立たないために、何らかの内的な基準（集団としての特徴）でカルトを定義するのは難しい。また、カルトという言葉には否定的なニュアンスが含まれているため、中立的な学術概念として使いにくいところもある。そのため、カルトという概念の使用を避けて新宗教運動（New Religious Movements）という言葉を用いる宗教研究者も少なくない [Hexham and Poewe 1997; Bainbridge 1997]。

しかし、カルトと名指されることによって、カルトと社会の相互作用が生まれる状況を分析するためには、カルトという言葉に含まれる否定的なニュアンスが重要になる。本稿では、この意味でカルト概念を使用する。すなわち、内的な基準からカルトを定義するのではなく、外部社会との関係（カルトと名指される社会的状況）からカルトをとらえる視点である⁵⁾。

4) 創唱宗教とは、創始者である教祖と教祖によって創唱された教義をもつ宗教形態で、ひろく布教伝道活動を展開する。宗教研究では、常民の間で伝承される民間信仰と対比される [櫻井 1966 : 10-11]。

5) ジェームズ・ベックフォードは、カルトと呼ばれる宗教運動に対する「一般の人びとの反応を扱う研究においては、ポピュラーな用語、すなわち『カルト』を使用する必要がある」[Beckford 1985:12]と述べている。本稿でカルトという言葉を使うのも、この立場からである。

社会的に批判・非難を受けることによって、教団と外部社会の相互作用は揺れ動く。外部からの批判を避けるために、教団が当初の過激な教義・活動をやめて、しだいに穏健化する方向にすすむ場合もあれば、外部から批判されることで内閉化し、よりいっそう過激化することもあるだろう。カルトというラベルを貼ることは、教団と社会の関係の変化を引き起こす。

植島啓司は、外部社会との緊張関係にこそカルトの特徴があると指摘する〔植島1998:49-50〕。カルトがカルトであるためには、社会に迎合することなく緊張関係を保ちながら、その一方で対立を強めすぎて社会から潰されることのないよう、ぎりぎりのところに存在をアピールしなければならない。ここで大切なのは、社会との対立関係がカルト入信における決定的な力として作用するということである。カルトの周縁の性格がカルトの魅力にもなる。

カルトに批判的な論者は、なぜ反社会的なカルトに人びとが入信するのかという問いに対して、彼らはマインド・コントロールされて入信させられているのだと推測する。たとえば、社会心理学的マインド・コントロール研究の日本での第一人者西田公昭は、「このように多数の信者が、なぜ自己破壊的な行動を大した抵抗もなく同時に受け入れたのかを社会心理学的に説明しようとするとき、信者の自発的思考から帰結した行動ではなく、他者によって個人の意思決定過程や行動を操作されたのではないか、という説明が成り立つと思われる。つまり、カルト・マインド・コントロール(cult mind-control)である」〔西田1995b:18〕という。しかし、こうした見方は、個人の主体性をまったく認めない点で問題がある〔伊藤1997〕。また、後述するように、カルト入信過程のモデルとして十分な説明力をもつとはいえない。

ソシオン理論の視座からいうと、カルトのメンバーが意思決定過程を支配されていると想定するのではなく、カルトが非難される社会的状況こそが人びとをカルトに向かわせる動因になると考える。このメカニズムは、ソシオン・ネットワークのダイナミクスとしてとらえられる。だが、ネットワーク分析に入る前に、まず荷重概念によってカルトの集団構成について考察しよう。S.フロイトやR.カイヨワの知見と関連づけながら、ソシオン理論を使ってカルトの集団構成とその吸引力を説明する。

1.4 ほれこみ

一見すると奇異なイデオロギー集団に見えるカルトが人びとを惹きつけるのは、集団としての吸引力をもつからと考えられる。「集団心理学と自我の分析」においてフロイトは、

1人の指導者をもち、組織が比較的分化されていない1次集団のリビドー的構成を「ほれこみ (Verliebtheit)」のメカニズムとしてあきらかにした。リビドーとは、愛として総称されるすべてのことに関係する量的な衝動のエネルギーを指す概念である。集団の成立は持続的なリビドー備給にかかっている。

集団が成立するためには、愛の対象への敵意として現れる自己愛が制限され、成員どうしがリビドー的に結ばれていなくてはならない。フロイトは、教会と軍隊を例にあげて、これらの集団を成り立たせるのは、「集団のすべての個人を一様に愛する首長がいる、というおなじ眩惑 (幻想)」[Freud 1921 = 1970:214] であるという。この幻想のもとで、成員は一方で指導者に、他方で他の成員にリビドー的に結合する⁶⁾。成員の指導者に対する関係が「ほれこみ」である。「ほれこみ」とは、性衝動から発する対象備給であるが、性的満足によって消滅する感性的な愛とは異なり、消えたばかりの欲求を復活させてリビドーの備給を持続する情愛的感情傾向である。

指導者のカリスマ性は、集団における「ほれこみ」のメカニズムから発生する。「ほれこみ」の特徴は、性的な過大評価である。フロイトによると、性的な過大評価とは、「愛の対象にたいしてある程度批判力を失ってしまって、その対象のすべての性質を、愛していない人物やあるいはその対象を愛していなかった時期に比べて、より高く評価するという事実」[ibid.:228] を指す。「ほれこみ」の対象には自己愛的リビドーが大量にそそがれるため、理想的な自我が投影される。対象に対する批判能力は失われ、対象はその価値によって愛されるという錯覚が起きる。だが実際には、愛しているからこそ対象が価値をもつと感じられるのである。自我は、理想化された対象に依存し、自らのすべてを捧げるようになる。

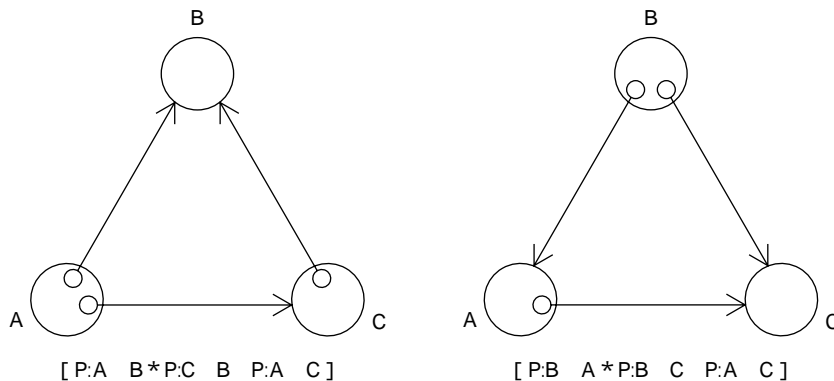
そして、自我はますます無欲でつましくなり、対象はますます立派に高貴なものになる。最後には、対象は自我の自己愛のすべてを所有するようになり、その結果自我の自己犠牲が、当然の結果として起こってくる。いわば対象が自我を食いつくしたのである。謙遜と自己愛の制限と自己の損傷、これらの特徴は、どんな場合のほれこみにもつきもので、極端な場合には、もっぱらこの特徴がつよめられ、感性的な要求は後退してしまうために、ただそれだけが支配するようになる。[Freud 1921 = 1970:228]

6) 精神分析では、社会的現実を構造化する幻想が焦点となる。ジジエクは、つぎのようにいう。「幻想は認識のほうにあるのではなく、すでに現実そのものの側、つまり人間がやっていることの中にあるのだ」[Žižek 1989 = 2000:53]。社会的現実とは究極的には倫理的構成物であり、幻想によって支えられているのである。

集団成員にとっては、「ほれこみ」の対象が自我理想の代わりとなる。自我理想への自我の依存によって、理想化された教祖への隷属、従順、無批判の態度が生まれる。カルトのような1人の指導者をもつ集団は、「同一の対象を自我理想とし、その結果おたがいの自我で同一視しあう個人の集まりである」[Freud 1921 = 1970:231]。つまり、集団では、指導者への「ほれこみ」と他の成員との同一視によってリビドー的結合が構成される。

こうした集団のリビドー的構成は、ソシオン理論では荷重演算論理による集団力学の問題としてとらえられる。同じ対象を自我理想とする成員間の同一視による集団のリビドー的構成は、トライアドの荷重演算論理に基づく。荷重変換をとともなうトライアド動作には、「媒介直列」(直列結合)と「共有並列」(並列結合)の2種類がある。「媒介直列」は、AがBを信頼し、BがCを信頼しているとき、AはCを信頼するという荷重動作である。「共有並列」は、AがBを信頼し、CもBを信頼しているとき、AはCを信頼するという荷重動作である[木村 1996:175-176]。トライアドの荷重演算は、荷重の正負(信頼や不信)順序、向きによって16通りのパターンが考えられるが、ここでは、カルトの集団構成にかかわる正の「共有並列」の2パターンについて説明する(図1)。

図1 トライアド 共有並列



注： は正の荷重(信頼、愛)を表す。

まず第1に、信者Aが教祖Bを信頼し、信者Cも教祖Bを信頼しているとき、信者Aは信者Cを信頼するというパターン [P:A B * P:C B P:A C](Pは正の荷重、 は荷重の向きを表す)である。第2に、その「裏」のオペレーションとして、教祖Bが信者Aを信頼し、教祖Bが信者Cを信頼するとき、信者Aは信者Cを信頼するというパターン [P:B A

*P:B C P:A C]である。前者は、同じシンボルに正の荷重を振り込むことで連帯を生み出す働きである。同じ神を崇拝する信仰共同体がこれにあたる。後者は、逆に同じ中心から等しい荷重賦与によって生まれる連帯であり、神からの等しい愛を受け取る共同体を形成する。

「ほれこみ」によって共通の自我理想にコミットする者どうしのヨコの連帯は、「共有並列」の荷重演算論理によってほとんど自動的に生み出される感情動作である。木村によると、「この演算オペレーションは、コミュニケーションや知覚によって新しいネットワーク情報がソシオンに入力された瞬間に（あるいは一晩ほど時間をおいてじわじわと）、その情報を得たソシオンのサブネット（あるいはメタネット）内部において発生する荷重の3項動作であり、基本的にそれ自体無意識の感情の思考である」[木村 1996:175]。フロイトのいう、「集団の中の個人は彼らが同等に、また公正に指導者から愛されているという虚構」[Freud 1921 = 1970:237]は、トライアッドでの[P:B A *P:B C P:A C]の荷重演算論理から導かれる必然的帰結である。カルトの集団構成は、荷重演算論理に基づく堅固なネットワークの結合体といえるだろう。

1.5 極限的モラル

1人の指導者をもつ集団の強連結は、トライアッドの共有並列によって説明できるが、カルトの吸引力はそれだけではない。ロジェ・カイヨワは、なぜ周りから異端視される少数者集団がメンバーとなる人びとを惹きつけるかという問題について、興味深い指摘をしている（カイヨワの議論は「セクト」についてであるが、本稿でのカルトの語法とほぼ同じニュアンスでとらえられる）。

カイヨワによると、セクトの魅力は厳格な規律にある。カイヨワは、「人間がいつでも使う用意のできているエネルギーと、社会がその成員一人ひとりに処方箋でも書くようにして指定している要求とが、完全に一致するというようなことは決してない」[Caillois 1964 = 1990:87]という。献身的に奉仕したいにもかかわらず、社会がその場所を用意できないような一群の人びとを結合させるのがセクトの精神である。

彼らは、妬み深くまた背くことのできない連帯性の中で、財産や人格はもちろん、原理そのものすら顧みることのない一つの権力に奉仕しようとするのだ。彼らは無条件の忠誠をあえて要求する一つの律法を望むが、それこそはまさに熱狂に対して、なにか絶対的な勝利だけが与えることのできるまったく陶酔を約束するものなのである。

[Caillois 1964 = 1990:89]

社会を1個の道徳的共同体ととらえるデュルケーム社会学をうけて、カイヨワはセクトが「社会そのものよりもはるかに社会的なものであり、いわば純粹社会とでもいうべきものなのである」[Caillois 1964 = 1990:92]と指摘する。社会は個人よりも優位な位置を占める。純粹社会であるセクトにおいては、「誇り高い魂」だけが惹きつけられる「服従の徳」が何より大切になる。セクトのモラルは、「極限的モラル」である。「そこでは規則は至上であり、厳密に従うべきか、あるいは全く従わないかのいずれかでなければならぬ」[ibid.:103]とカイヨワはいう。「極限的モラル」を遵奉する集団は、退屈な日常に飽き飽きした人びとを惹きつける。

この平穩そのもの、この緊張の欠如の中にこそ、熱狂的な人びとをうながして、より過酷な風土の探究へと向かわせる動機を認めるべきなのであろう。彼らは自分たちを取り巻いている微温的な雰囲気から倦み、自分たちを待っているように思われる変わればえのしない運命から遁れようとするのだ。[Caillois 1964 = 1990:92]

セクトは、「秘法、自己犠牲、ヒロイズムによってたえず強固にされた闘いを通じて、緊密に結合された、選ばれた同志からなる集団のイメージ」[ibid.:137]を提供し、平凡な人生に抗議する人びとを引き込んでいく。セクトの精神とは、「秘密や熱意、忠実さや力の絶えざる源泉」[ibid.:137]だからである。

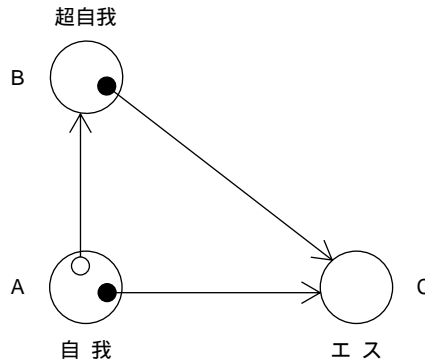
フロイトの「集団心理学」では、集団成員間のリビドー的構成が、1個の自我理想への同一化によって説明された。セクト集団の「極限的モラル」に関するカイヨワの議論は、個々の成員における自我理想への同一化の強度を考える上で有益である。自我理想とは、超自我のうちで高い価値を与えられた側面のことであるから、「極限的モラル」への服従は、超自我への自我の依存によると考えられる。セクトのメンバーの自己システムは、絶対的な服従を要求する超自我への自我の従属によって特徴づけられる。このメカニズムは、ソシオン理論における自己のトリオン構成としてとらえ直すことができる。

トリオンとはソシオンの内部に取り込まれた3者関係のモデルである⁷⁾。自我、エス、超自我の3項をトリオンのモデルに当てはめると、図2のようになる。図2のAを自我、Bを超自我、Cをエスと考える。超自我の発生はつぎのように理解できる。欲動にもとづく行為(C)が他者(B)から禁止されたとき、自己(A)は、その行為(C)について自己の一部が悪いのだというふう疎外して禁圧する。そうすることで、禁止する自己(A)

7) トライアド(3者関係)はふつう客観的実体的世界(オブジェクト・レベル)での関係を意味するが、トリオンは主観的意味世界(サブジェクト・レベル)に構成された3者関係の連結ユニットを指す概念である。トリオン回路に荷重ループが流れることで、他者の存在が意識野にリアリティをもって現前する。トリオンのコミュニケーションについては、3節と4節で詳説する。

は、他者（B）に同一化するのである。この他者（B）が、超自我の原型となる。負の「共有並列」[N:B C*N:A C P:A B]による荷重演算論理である。

図2 自己システムのトリオン構成



注： は荷重（信頼、愛） は負の荷重（不信、憎しみ）を表す。

フロイトによると、超自我はエディプス・コンプレックスの遺産である [Freud 1923 = 1970:279-280]。父親への同一視と父を除外したい願望のアンビヴァレンツというエディプス状況は、父への憧憬の代償形成としての超自我の発生において消滅する。幼い自我は、エディプス願望の妨害者である父の像を自分の内に設けることによって、この抑圧行為に打ち克とうとした。こうして良心および無意識的罪悪感としての超自我は、自我を厳格に支配する。超自我と自我の関係は、「お前は父のようであらねばならない」という命令と「お前は父のようであることはゆるされぬ」という禁制の両方を含んでいる [Freud 1923 = 1970:281]。この禁令が道徳意識の起源となる。フロイトは、「自我と自我理想とを比較して、おのれの不肖の身を批判することは、憧憬を抱く信者がよりどころにする謙讓な宗教感情をうむ」 [Freud 1923 = 1970:283] という。

自己のトリオンの構成は、自我の二重性による。フロイトは、自我が身体の表面的存在であることを強調して、「自我というものは外界に近いことと外界の影響とによって変更を受けたエスの一部分であって、刺激を受け入れたり防いだりするようになっていて、それはいわば一塊の生活体を包んでいる樹皮層に譬えることができます」 [Freud 1933 = 1971:448] という。自我は、外部の知覚と内部の知覚が同時に発生する身体表面に投射された精神である。フロイトによると、「それはあたかも身体以外の他の対象と同じものの

ように見られるが、触られると二種の感覚が生まれる。そしてその一つは内部の知覚に匹敵することが出来る」[Freud 1923 = 1970:274]。それゆえ、自我はエスに対しては外界を代弁する役割を担うと同時に、外界に対しては内界として反応するのである。このように、自我は外部と内部に対して2つの対立関係をもつ⁸⁾。自己システムが3者関係（トリオン）の荷重ループとして構成されるゆえんである。表面的存在としての自我が自己の一部を客体としてあつかうことによって、自我・エス・超自我というトリオンとしての自己が生まれる⁹⁾。エスを制圧する超自我に同調して自我もエスを抑圧するとき、自我は超自我に依存することになる。

カイヨワのいうセクトの「極限的モラル」は、自我、エス、超自我（自我理想）のトリオン回路を還流する荷重量の増大にかかわる。「極限的モラル」とは、超自我からの禁止が極端に強いことを意味する。超自我からの禁止が強ければ強いほど、自我もエスを強く抑圧することになる。すると、トリオンの荷重演算論理により、超自我への自我の依存の度合いも強さを増す（図2で右回りに荷重ループがどんどんまわっていくと考える）。厳格な規律に服従することは、規律をもたらず超自我への同一化を強める。自我のすべてを超自我に捧げる「ほれこみ」の強さは、規律の厳格さの関数と考えることができる。まわりつづけるループでは、起点がどこかはもはや問われない。こうして、理想的な自我のとり込み同一化の歓喜と厳格な規律への服従がひとつのループとしてつながる。

セクトはまずもって、誇りと屈辱とをこもごもに教える学校である。そこにおいては、自発的な服従が群衆から離脱していると感じることから来る誇りと均衡を保っている。厳格な規律に同意することから生ずる犠牲や自己放棄の苦しみは、すすんでこの厳格さと過酷さを選んだという確信によって償われる。[Caillois 1964 = 1990:97]

自我の投げ出し先となる超自我は、偉大であればあるほど自我にとって望ましい。厳格な規律は、エスの抑圧によって超自我への自我の依存を強化するトリオン装置といえる。

8) 鏡像帰還によって自己を構成する人間の主体が、根源的な他者性を内包することについて、ラカンも、「人間の自我とは他者である」[Lacan 1981 = 1987a:63]と指摘している。また、ドゥルーズも、「思考の能動性が、受動的な存在者へと、つまり受動的な主観へと振り向けられるので、この受動的な主観は、その能動性をはたらかせるといふよりは、むしろそれをおのれに表象 = 再現前化するものであり、その能動性の主導権を手に入れるというよりは、その効果を感じるものであって、結局、その能動性を、おのれのうちにおいてひとつの《他》なるものとして生きているのである」[Deleuze 1968 = 1992:142]と述べている。トリオンのモデルは、主体の根源的な他者性をソシオグラフによって視覚的にわかりやすく表現できる利点がある。

9) ソシオンの自己理論における「私I」「私II」「私III」と自我・エス・超自我のトリオンとの対応は、まだ明確に理論化されていない。1対1で対応しているのか、それとも独立した別のトリオンなのか、今後の検討課題である。これと似た問題として、フロイト精神分析における意識性の3種類（意識・前意識・無意識）と心の3領域（超自我・自我・エス）とのズレと重なり合いを含んだ、すっきりしない「対」がある [Freud 1933 = 1971:446-447]

1.6 宗教と家族の対立

カルトのカルトらしさは、社会的に批判されることにある。包括社会との緊張関係がカルトをめぐるネットワーク・ダイナミックスを生み出す。もっとも強くカルトを批判するのは、子どもをカルトに奪われた親たちである¹⁰⁾。カルトへの入信は、本人と家族との間に葛藤を引き起こす。子どもの突然のカルト入信は、しばしば親を驚かせる。親には、子どもがカルトに騙されているとしか思えない。子どもたちはカルトによって、マインド・コントロールされているに違いないと親は考えるのである¹¹⁾。

今日、いくつかの教団がカルトのラベルを貼られるのは、その入信勧誘の仕方が家族との間に葛藤を起こす場合である。入信時の家族とのトラブルが、カルトの証拠とされる。たとえば、シンガーとラリックはカルトの問題点として、「カルトは子供たちに被害を及ぼし、家族を四散させる」[Singer and Lalich 1995 = 1995:130] ことをあげている。

しかし、家族との対立はカルトだけの問題にとどまらない。聖書をはじめとして、多くの宗教の教えには、宗教と家族の対立という主題が見いだされる。カルトと家族の対立は、より普遍的な宗教と家族の対立としてとらえ直すことができる。たとえば、福音書にはつぎのような記述がある（引用は新共同訳による）。

イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。[マルコ 6:4]

わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っではならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。[マタイ 10:34-36]

大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に、自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない……」。[ルカ 14:25-26]

10) 今日のカルトをめぐる現象の目新しさは、カルト宗教に対する反対運動が組織化されている点にあることを中野毅は指摘している[中野 1997:100]。子どもをカルトに奪われた親たちと救出カウンセラーが中心となる反カルト運動の主要な目的は、マスメディアを利用したカルト批判キャンペーンと、子どもをカルトから奪い返す救出活動である。

11) 子どもが自発的意志を奪われているという想定のもとでおこなわれる救出カウンセリングは、救出された子どもを、「存在論的不安定」の「安住しえない境地」に置くコミュニケーション・パターンに陥る危険性がある[渡邊 2000]。カルト脱会の過程は、マインド・コントロールが解けて元の人格に戻るという単純なことではなく、アイデンティティの転換をめぐる複雑な道程をたどる。

また、ジョン・バンヤンの『天路歷程』にも、求道者が家族から離れて信仰に走る場面が描かれている。

私は夢の中で、その男が走り出したのを見た。ところが、わが家からいくらも走らぬうちに、妻子に見つけられた。歸つてくださいと、うしろから呼びもとされた。けれども男は、耳に指をあて、『生命！生命！永遠の生命！』（ルカ傳xix.26）と叫びながら、驅けて行つた。うしろも見かへらず、（創世記xix.17）野原の眞中さして走つて行つた。[Bunyan 1685 = 1949:32]

『天路歷程』は、17世紀イングランドの伝道師による寓話で、信仰者が現世的誘惑に打ち克って神の救いを得るにいたる過程を、巡礼になぞらえて描いたものである。『天路歷程』の巡礼者がまず最初に断ち切ったものは、家族であった。呼び戻す家族の声を振りきって、彼は巡礼に出ていく。

吉本隆明は、宗教が性的な結合を超越者との関係に置き換えることを強いるために、性的結合（と禁忌）の領域である家族と本質的に背反してしまうことを指摘する[吉本1982:126-127]。あるいは、もうすこし微妙な関係の表現になるが、大村英昭は、宗教と家族が互いにモデルであると同時にライバルでもあるというモデル=ライバル関係の普遍性を指摘している[大村1996:49]

カルトと社会の対立、カルトと家族の対立に焦点化して考えると、今日のカルト現象も宗教の発生をめぐる原理的問題の一端である可能性がある。新しい宗教は、社会の道徳的許容圏の周縁に発生するため、つねに社会との間にコンフリクトを経験する。あらゆる創唱宗教はカルトとして生まれるといえるかもしれない。だが、いまは結論を急ぐ前に、具体的なデータの検討が必要である。社会とのコンフリクト状況下で、カルトがメンバーを獲得していくのは、どのような手段によるのか。次節では、現代的なカルトの入信勧誘システムを検討する。

2 帰還不能点累積システム

2.1 入信過程

入信において、カルトと家族との対立が起きる。そして、対立の厳しさがカルトの問題点と考えられている。カルト批判者のシンガーとラリックは、「現在のカルトにたいする最も根本的な批判のひとつは、カルトの詐欺的な信者、会員集めの方法に向けられている」[Singer and Lalich 1995 = 1995:49]という。シンガーらによると、カルトの勧誘はマイン

ド・コントロールを悪用しているという。マインド・コントロールとは、それを受けた人が人格操作されていることに気づかないような巧妙な思考改造テクニックとされる。

マインド・コントロール理論は、カルト入信を説明する社会心理学的枠組みである。主として、カルトに批判的な心理学者・精神科医がマインド・コントロール概念によってカルト入信を説明する。日本へのマインド・コントロール概念の導入のきっかけとなったスティーヴン・ハッサンの著書『マインド・コントロールの恐怖』では、マインド・コントロールは、「個人の人格（信念、行動、思考、感情）を破壊してそれを新しい人格と置き換えてしまうような影響力の体系」[Hassan 1988 = 1993:27]と定義されている。新しく置き換えられる人格は、「もしどんなものが事前にわかっていたら、本人自身が強く反発しただろうと思われるような人格である」[ibid.:27]とハッサンはいふ。人格の置き換えは、行動、思想、感情、情報のコントロールによってなされる。

社会心理学者西田公昭の議論は、ハッサンのマインド・コントロール論を実験社会心理学的に裏付けている。西田によると、マインド・コントロールは、「他者が個人の『意思決定過程（decision-making process）』に微妙に影響をおよぼすこと」[西田 1995a:57]であり、社会心理学がこれまであきらかにしてきた認知・感情・行動の原理の応用であるという。たとえば、人は好意を示してくれる相手に好意的に反応するという「好意性のルール」や、最初に小さい要求を承認させてからだんだんと大きい要求を出すと承認を得やすいという「一貫性のルール」などが、マインド・コントロールのテクニックの中身と考えられる。

西田は、カルト元信者272人を対象として実施した質問紙調査の結果から、カルトによるマインド・コントロールの効果が実証できたと結論づけている。調査論文の結論部分で、西田はつぎのように述べる。

その中で、カルト・マインド・コントロールを用いた伝道が、カムフラージュによる情報コントロール、対人魅力、個人的ならびに社会的現実性の効果、集合状況での情緒の高揚、教祖という対象への絶対的価値の勢力が時間的推移を連動しながら巧みに機能していることを明らかにした。[西田 1993:142]

しかし、これは元信者を対象とした調査であることに注意する必要がある。カルトの勧誘過程におけるマインド・コントロールが、個人の意思決定過程を操作して信念体系を変化させる効果をもつという命題を証明するためには、勧誘された人すべてを対象とした調査を実施する必要がある。つまり、サンプルの母集団は、勧誘されて入信した人だけでなく、勧誘されても入信しなかった人も含めた被勧誘者全体でなければならないはずである。被勧誘者全体からのサンプリングによって、はじめてマインド・コントロールの効果を検

証することができる。西田の調査は、元信者だけを対象としていた。元信者とは、いったん入信して脱会した人たちである。結果的に入信した人たちを対象にした調査から、マインド・コントロールの効果が証明されたと結論づけることはできない。入信した人だけを対象にした調査では、カルト入信がマインド・コントロールによるという仮説は必ず検証されてしまうからである。この反証不可能な命題を、勧誘されても入信しなかった人びとにまで拡張すべきではない。西田は、いわば首尾よくマインド・コントロールされた人だけを対象にして、マインド・コントロールの効果が証明されたという結論を導いてしまっている。効果があったかどうかは、勧誘されて入信した人と入信しなかった人とを比較してはじめていえることである。元信者の調査結果から、マインド・コントロールの効果を人間行動の一般原理にまで拡張するのは、サンプリングの上で問題がある。

また、マインド・コントロールの説明原理として援用される実験社会心理学の知見は、それだけで実際の具体的な社会過程を説明するには不十分である。K. ガーゲンが指摘するように、人間は刺激そのものではなく刺激の意味や概念に反応するため、たとえ実験室内においても刺激を完全にシステマティックに統制することは不可能である [Gergen 1994 = 1998:45]。ましてや、現実の社会的コンテクストにおいては、独立変数と従属変数の間に無数の媒介変数・攪乱変数が介在するし、さらに媒介メカニズムの変化がきわめて短い時間内に変化していく可能性もある。「好意性のルール」や「一貫性のルール」といった実験社会心理学の知見を、実際の社会的コンテクストにそのまま当てはめて説明するのは無理がある。

カルトによる人格操作という発想は、マインド・コントロールという言葉の響きの新鮮さとあいまって、マスメディアの影響のもと広く社会に浸透した。しかし、人間個体内の過程に焦点化しがちな心理学的理論では、カルト入信過程を十分には説明できない。カルト入信という具体的な社会的コンテクストで、勧誘者と被勧誘者がどのような社会的相互行為をおこなうかを検証する必要がある。

宗教社会学者によるカルト入信研究は、勧誘過程における相互作用に注意を向けている点で、心理学的マインド・コントロール論より現実に即した見方といえる。カルトへの入信を説明する宗教社会学の古典的モデルとして、たとえばロフランド＝スターク・モデルがある [Lofland and Stark 1965]。ロフランドとスタークは、入信過程をつぎの7段階として想定した。(1) 持続的で激しく感じられる緊張を経験、(2) 宗教的問題解決パースペクティブ、(3) 自らを宗教的探究者 (seeker) と位置づける、(4) 人生の転機で入会する宗教と出会う、(5) その集団内の1人以上の信者と感情的な絆を形成(あるいは前も

って存在) (6) その宗教以外の人たちとの愛着は存在しないか、あるいは弱められる、
(7) メンバーと集中的に相互接触する。

この図式には、3つの局面が含まれている。すなわち、(A) 潜在的入信者における動機
の形成、(B) 潜在的入信者と勧誘者の出会い、(C) 持続的関係形成による信仰の深化、
以上の3局面である。簡単にいうと、入信前の態度・環境、入信のきっかけ、入信後の信
仰確立となる。このモデルでは、あらかじめ入信動機をもつ潜在的入信者が、その動機に
適合的な救いの教えを提示する勧誘者と出会うことによって、入信の過程がはじまると考
えられている。

しかし、潜在的な入信動機という考え方に対して疑問も提起されている。「動機の語彙」
論の視座からすると、入信動機というのは、むしろ入信した後に教団から授けられるもの
と考えられる。大村英昭はつぎのようにいう。

われわれは、人が宗教に入信する動機、つまりニーズを、宗教とは別のところ(宗
教的意味システムの外部)で、あらかじめ得ておられると錯覚しているのではなかる
うか。ところが、本当はそうでない。少なくとも私の調査経験から推して、人びとは
教団に入って以降に、かれらがその教団に来た、そもそもの理由が授けられているの
である。[大村 1994:104]

入信過程をすすんでいくうちに、入信動機も形成されていく¹²⁾。したがって、入信する
人びとの潜在的動機をあらかじめ想定するのではなく、入信過程においてどのような相互
作用があり、信念の転換がすすめられるのかに焦点を合わせるモデルが必要である。

本稿では、カルトの入信勧誘システムを、一定の過程を経て先へ進んでいくにしたがっ
て、釣り針の「かえし」のようにいったん呑み込んだら戻るときに「痛み」を感じるよう
な仕組みとしてとらえるモデルを提示する。カルト入信勧誘システムは、先へ進めば進む
ほど後戻りしにくくなるよう構成されているという仮説である。カルト教団で確立された
入信勧誘の手法は、一定の手続きを踏んでいくなかで、しだいに抜け出せなくなるシステ
ムとして組み立てられている。この視点から見たカルトの入信勧誘システムを、入信のス
テップを踏むごとに、戻ることが困難になるポイントが蓄積されていくという意味で、
「帰還不能点累積システム」と名づけよう¹³⁾。段階を踏んでいくにつれて後戻りが難しく
なるシステムとして、カルトの入信勧誘過程をとらえる視点である。入信過程で一気に深

12) たとえば、ベックフォードは、エホバの証人を事例として、信者の語る回心体験談がその教義を構成要素として
組み立てられることをあきらかにしている [Beckford 1978]

13) 帰還不能点の「点(point)」には、カルト入信にいたる道程上の1地点(point)というニュアンスと、しだいに
累積されていく帰還困難の得点(point)というニュアンスの両方が込められている。

くはまり込んでしまうケースや、入信しかけて途中で離れていくケース、行きつ戻りつしながら徐々に入っていくケース、振り出しに戻っては再スタートするケースなどのダイナミックな過程は、帰還不能点の累積あるいはキャンセルの動作によって説明できるだろう。

以下では、日本で代表的なカルトとされる統一教会(世界基督教統一神霊協会)の入信過程を事例として検討する¹⁴⁾。統一教会は、入信勧誘過程を組織化している点で際立っている。統一教会の勧誘方法は、信者の家族や元信者、反カルト運動家からの批判的であり、マインド・コントロールを悪用した違法な入信勧誘システムであると指摘されている。統一教会の勧誘システムを描く上でのデータは、いくつかの事例から抽出したモデルとして呈示する¹⁵⁾。

2.2 統一教会の入信勧誘システム

統一教会は、1954年に韓国で文鮮明によって創設されたキリスト教系の新宗教である。欧米では1960年代後半から、日本では1958年から布教活動を展開している。1960年代には、「親泣かせ原理運動」(朝日新聞夕刊、1967年7月7日)として大学キャンパスでの勧誘が社会問題となっている。1970年代には、統一思想に基づく反共産主義の政治運動(勝共連合)が共産党と激しく対立し、さらに1980年代後半からは、多くの被害者を出した靈感商法が問題となった。有名人が参加した1992年の国際合同結婚式(祝福)は、テレビのワイドショーで話題となり、その後の脱会騒動も世間の注目を集めた。

統一教会の教えは「原理」と呼ばれる。啓示を受けた文鮮明の説教を初期の弟子たちが記録したものが『原理講論』であり、公式の教理解説書となっている。『原理講論』は新約・旧約の聖書解釈をもとに、人間が歩むべき救いの道を示したものである。人類は、原罪による墮落の負債を神に対して支払わなければならない。「蕩滅」という一種の罪滅ぼしによって天国が実現されるというのが、「原理」の中心的な教えである。

1960年代後半から、統一教会の勧誘方法は洗脳であるとして、原理運動被害者父母の会など、信者の親たちのグループから非難されてきた。統一教会の勧誘の仕方を批判するとき、かつては洗脳という言葉が使用されたが、最近ではマインド・コントロールという言葉がよく使われる。1980年代から、統一教会の勧誘方法はかなり組織化されてきている。

14) 世界基督教統一神霊協会の略称には、「統一教会」と「統一協会」の2種類がある。教団に批判的な論者は、教会の名に値しないとして「協会」の略称を使用し、教団側は英語表記がUnification Churchであることから「教会」の略称を使用する。本稿では基本的に教団の表記法「統一教会」の略称を使う。

15) データは、筆者が1999年3月から実施している聞き取り調査に加えて、「青春を返せ裁判」資料、元信者の手記、教会の勧誘マニュアル、信者の手記なども参考にしている。

元信者が、騙されて入信させられ精神的・社会的自由を奪われたことについての精神的・財産的賠償を求めて統一教会を訴えた「青春を返せ裁判」では、原告らは、統一教会の入信勧誘システムがマインド・コントロールの悪用であると訴えている。

統一教会の入信勧誘過程は、地域によって多少の違いはあるが、おおよそ、つぎのような段階で進行する。

アンケート・勧誘・知人の紹介 ビデオセンター 2デイズセミナー

ライフトレーニング 4デイズセミナー 新生トレーニング 実践トレーニング

献身

ビデオセンターは、ビデオ講座によって「原理」を学ぶ文化施設である。セミナーでは、合宿形式で集中的に「原理」講義を受ける。セミナーのプログラムには、レクリエーション活動も含まれる。ライフトレーニング、新生トレーニング、実践トレーニングは、通教（通い）ないし入教（泊まり込み）の教化期間で、「原理」講義を受けることから始めて、最終的には街頭での勧誘や友人への伝道活動やモノ売りなどの経済活動に従事することになる。最後は、献身にいたる。献身とは、財産すべてを教団に捧げ、信仰の道に生きることである。つまり、出家と考えてよい。

ビデオ講座や講義による「原理」の学習は、被勧誘者を「原理」の世界観へと導く役割を果たす。ジョン・ヒックが指摘するとおり宗教的意味世界は、「何かを何かとして経験する」という解釈行為の枠組みになる [Hick 1990 = 1994:137-138]。世界の解釈枠組みとなる宗教的意味の網の目（あるいは魚を捕るための口が小さく中の広い「ヤナ」の仕掛けのようなもの）は、救済の希望と地獄の絶望によって閉じられた世界を構成する。

希望を頂点とし、絶望を底にもつ袋綴じされた意味世界 = セミオス (semios) のなかにいる人は、希望と恐怖を過大評価し、特定の袋綴じ世界を選択したことのリスクを過小評価する傾向がある。袋綴じ世界の内部では、意味世界の原選択は見えにくくなる。意味世界をとおして世界を経験するため、外部の視点は思考可能領域から外れてしまうせいである¹⁶⁾。帰還不能点累積システムは、カルトのセミオスに人びとを引き込むための装置になる。

16) セミオスへの参入はリスクをとまなう。入信を「信頼」の問題として考えると、このリスクが原理的に解消不可能であることがわかる。ルーマンは、「信頼はつねに、ある際どい選択肢に関わるのであり、この際どい選択肢においては、信頼を実際に示して得られる利益よりも、信頼が期待外れに終わったときの損失のほうが大きいのである」 [Luhmann 1973 = 1990:40] という。信頼は、複雑性の縮減をとおして行為可能性を開示するが、信頼の決定はリスクをとまなう。信頼はつねに「目下手元にある情報から、与えられた以上のものを引き出すことによって成立する」 [ibid.:43]。情報の過剰利用にリスクはつきものだからである。そして、宗教的信念は、信頼におけるリスクの過小評価をもたらしやすい。ベイトソンが指摘したように、宗教的命題の妥当性はそれを信じるかどうかにかかっている。ベイトソンは、つぎのようにいう。「天国に“父”がいるかどうかは問うまい。ただ『天にまします我等の父よ』ということばに含まれている。その客観的眞実性さもなくば非眞実性に加えて人間の同胞性についての暗黙の前提、そしてこの前提はここで論じている範疇に属すること、同胞愛を信じてそれののっとって行為すれば、期待どおりに相互関係が進んでいくこと（その逆も真）を指摘したいのである」 [Bateson and Ruesch 1951 = 1995:242]

この入信勧誘システムにおいて、帰還を困難にするポイントは、喪失への怯えと恐怖の「痛み」と考えられる。累積する帰還不能点としての「痛み」(喪失への怯え・恐怖の予期ポテンシャル)には、いくつかの種類がある。(1) お金が無になる恐怖、(2) 心が痛む(家族の不幸=靈感商法のレトリック)、(3) 努力が無になる恐怖、(4) 独りぼっちになる恐怖、(5) 祈りが無になる恐怖などである¹⁷⁾。

勧誘は、街頭でのアンケートや戸別訪問による出会いから始まる。アンケートでは、仕事や友人関係、現在の関心事、悩み、家族構成などを尋ね、ビデオセンター(ビデオ講座による教化施設)に誘う。ビデオセンターでは、「自己啓発ができる」とか「今までの自分が変えられる」といってビデオ講座の受講をすすめる(このとき、手相占いや家系図占いをうける場合もある)。「自分が変わる」という説得は、とくに現状に深刻な苦悩をもってはいないけれども漠たる不安を抱く多くの人にとって、魅力的な言葉である。統一教会では、「転換期」という言葉がキーワードとして効果的に使用される。

全13巻のビデオ講座を受けるよう説得し、なるべくその場で入会金の支払いを求める。先にお金を払ってしまうと、せっかく払ったのだから無駄にしたいくないと思う。これが最初の釣り針の「かえし」としてはたらく。ここでやめると、払ったお金が無になるように感じられる。

入信にいたる途上で、教団のかかわる絵画展覧会で絵の購入をすすめたり、霊験商品(壺や印鑑など)の購入をすすめられることもある。物品の購入はすべて払ったお金が無になる恐怖として、帰還不能点の役割を果たす。払ったお金が無になる恐怖の最大のもの、献身時における献金だろう。全財産の献金は、強力な帰還不能点として作用する。

統一教会の勧誘者は、被勧誘者の情報をできるだけ詳しく把握しようとする。職業、趣味、家族構成、収入、関心事などであるが、とりわけ重要なのは、その人にとっていちばん切実な個人的ニーズである。ある人にとっては、それは自己変革のニーズであるかもしれないし、べつの人にとっては経済的ニーズかもしれない。靈感商法で問題となったケースでは、しばしば家族の病気・不幸からの解放がニーズとなる。とりわけ、子どもをもつ親への勧誘では、子どもが不幸になるとか、子どもの将来が危ないといった説得は効果的である。親にとっては子どもの幸福(子どもの不幸からの解放)が何よりのニーズだからである。

17)「痛み」の種類は、教義体系によっても違ってくるだろうし、その教団が誰を勧誘のターゲットにするかによっても違ってくるだろう。ここでは分析モデルの提示にとどまるが、より厳密な「痛み」の類型化のためには、さらなる実証データの収集が必要となる。

ニーズを把握した上で、いままでニーズが充たされなかった原因を、祖先の罪や墮落、あるいはその人自身の罪業として指摘する。こうして罪悪感・不安を喚起し、被勧誘者をぎりぎりまで追い込んでから、ニーズが充たされる方法を提示する。「原理」を学ぶことで、救われると説くのである。

勧誘する際には、おそらく希望（救済）を刺激することよりも、絶望（地獄）を焚きつける方が効果的である。統一教会の勧誘者が伝道対象者ひとりひとりについて作成する「ケア・カード」には、生年月日、家族構成、関心分野、趣味、生い立ちといった項目に加えて、いささか露骨過ぎるようにも思えるが、「ニーズ（泣きどころ）」という記入項目がある〔氏族メシア勝利マニュアル編纂委員会編 1996〕。「泣きどころ」を衝かれると、人は弱い。そして、「泣きどころ」から逃れるために勧誘入信システムのステップを進むと、ますます後には戻りにくくなる。「泣きどころ」もまた、釣り針の「かえし」として作用する。自分自身の不幸もそうであるが、家族の不幸をネタに説得されると、断るときに心の「痛み」を感じてしまう。「おばあさんを救うために、壺を買ってください」とか「娘さんを救うために『原理』を勉強してください」といわれると、いかにも断りにくい。それにいったんこの話を聞いてしまうと、たまたま家族に不幸があったとき、自分に責任帰属してしまう可能性が高くなる。もしあの日献金していれば、こんな不幸な目には遭わないで済んだかもしれないと考える。これが、帰還不能点としての心の「痛み」である。ただし、絶望の追い込みが行き過ぎると脅迫になる。

入信過程で学ぶ「原理」の内容はきわめて複雑である。教理解説書として使用される『原理講論』も、独特の概念や用語で書かれているため、非常に難解でわかりにくいものとなっている。たとえば、神と被造物との関係を説明する文章は、つぎのようなものである。

ここにおいて、二性性相を中心として見た神と被造世界との関係を要約すれば、被造世界は、無形の主体としていまし給う神の二性性相が、創造原理によって、象徴的または形象的な実体として分立された、個性真理体から構成されている神の実体対象である。〔世界基督教統一神霊協会伝道教育局 1994:48〕

ごく簡単に要約すると、神と被造世界の間には、主体と客体の関係が成り立つということである。「二性性相」「個性真理体」「実体対象」といった概念は、「原理」の内容として重要な意義をもつため、十分に用語と意味を理解する必要がある。このような「原理」を理解するには、そうとうの努力が要求される。学習の努力は、努力が無になる恐怖の帰還不能点として機能する。これだけ努力したのに入信しなかったら、いままでの努力がすべ

て無駄になってしまう。努力が無にならないようにするためには、入信への道先へ進んでいくしかない。入信過程から外れてしまうと、努力が無になる恐怖が「痛み」として感じられるからである。さらに、「原理」を理解し、救済を信じて神に祈るようになると、祈りが無になることが帰還不能点になる。カルト入信への道から逸れてしまうと、捧げた祈りが意味を失うからである。

親密な関係への引き込みも統一教会の勧誘の特徴である。勧誘者は、被勧誘者に対して手厚く対応する。真摯に話を聞き、相手の長所を誉め上げる。手紙や電話でも親切と誠意をつくす。これらは「賛美のシャワー」ともいわれる。教会の人たちとの親密な関係は、教団の魅力である。だが、人との親密なつながりは心地よいものであればあるほど、それが失われることへの不安・恐怖をともなう。独りぼっちになる恐怖の帰還不能点である。

2.3 シャドー・オペレーション

お金・努力・祈り・その他を自らが支払うことによって、その対象の価値を高く評価するようになるというメカニズムは、部分的には認知的不協和理論によって説明できる [Festinger 1957 = 1965]。ビデオセンターからの帰り道、つまらないものにお金を払ってしまったと悔やむこともあるかもしれない。お金を払ったという行為と、ビデオ講座があまり面白そうではないという認知の間に不協和が生じる。このとき、人はしばしば不協和を低減するために、面白そうでないという認知の方を変える。お金を払ったのだから、それだけの価値はあるはずだ、という信念を形成することで認知的不協和に対処する。

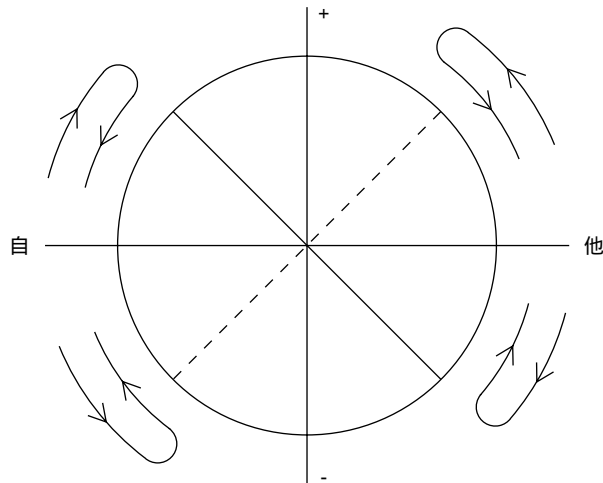
ところで、認知的不協和低減の方法には、行動を変えること、行動に関する認知要素を変えること、環境に関する認知要素を変えること、新しい認知要素を加えることなどいくつかある。カルト勧誘システムが認知的不協和理論に適合するというだけでは、入信勧誘システムを十分には説明したことになるだろう。これを説明するのに、帰還不能点の概念が有効である。

カルト入信過程において、お金・努力・祈り・その他を支払うことは、それが自らの「痛み」になる行為であるため、個人はその後に出会う可能性のある不協和な認知要素（ビデオがつまらないとか、宗教臭さが怪しいなど）を変えるという不協和低減方法を選択しやすい。さらに、お金・努力・祈り・その他の支払いという行為は、帰還不能点の累積によるセミオスへの引き込みとして機能する。このセミオスへの引き込みのメカニズムは、ソシオン理論におけるシャドー・オペレーション概念によってあきらかにすることができる。シャドー・オペレーションによって、「痛み」が救済の希望に（そして地獄の絶

望にも)つながるのである。

「痛み」によるセミオスへの引き込みは、「献身」と「崇拜」の荷重動作による。入信勧誘システムに組み込まれた「痛み」は、ダイアッドの荷重オペレーションの結果として、対象の価値を高める働きをする。荷重とは、表象にリアリティの感覚体験をもたらす無意識のポテンシャルと考えるとわかりやすい。自己の「痛み」が、リアリティ生成の荷重オペレーションによって変換され、シャドー感情としての「崇拜」を発生させるのである。このメカニズムを簡単に説明しよう。

図3 差異のシーソー



社会ネットワークの結び目としてのソシオンは、2者関係において自他の荷重差に同一化する傾向がある。簡単にいうと、他者の欠乏は私の余剰として、他者の余剰は私の欠乏として経験される。あるいは反対に、私の欠乏が他者の余剰として、私の余剰が他者の欠乏として感じられる。2者関係は、このような「差異のシーソー」を構成する(図3)。

差異のシーソーにおいては、自己の余剰を増やそうとすると他者の欠如が増え、他者の余剰を増やそうとすると、自己の欠如が増える。したがって、比較による荷重差に同一化する限り、自己の欠如を減らして余剰を増やそうとする「欲」には、他者の余剰を減らして欠如をもたらそうとする下向きの運動がともない、他者の欠如を減らし

て余剰をふやそうとする「愛」には、自己の余剰を減らして欠如を引き受けようとする下向きの意志が発生することになる。[木村 2000:68]

木村によると、シーソーの向こう側は、ほとんど無意識に生きられる。そして、「モニターが他者を指向していて、自己の表象が意識に現れなくても、荷重そのものは他者の負量としてすでに誕生している、といった局面」[木村 1993:8]が、シーソーのこちら側に無意識に反対荷重として発生する「シャドー」である。

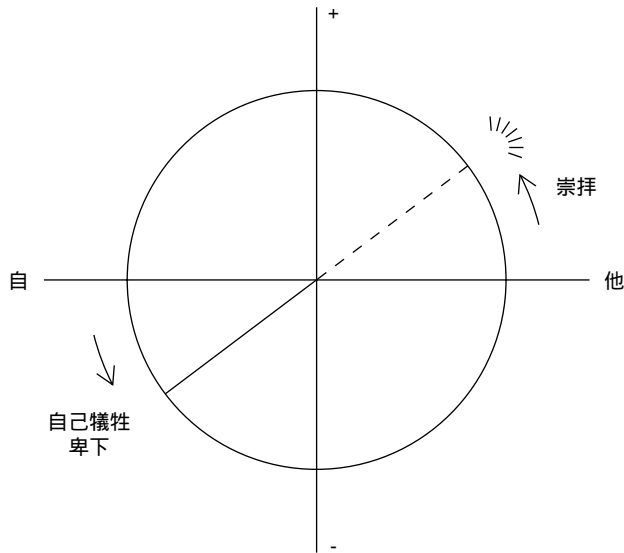
シャドーとはじっさいにモニターされている荷重量の180°変換によって対極の象限にうまれる無意識の(リアルタイムには気づかれていない)荷重である。他者もシャドーをもちうるし、自己もシャドーとなりうる。シャドーは、ちょうど意識の陰に生まれる無意識の影であり、この「影」がある特定の他者(あるいは自己)のシニフィアン(名や顔、姿あるいは墓など)に投射されてもやわれたとき、「存在」となる。[木村 1993:10]

たとえば、「自慢」ばかりする人は、シャドーとして他者への「さげすみ」の感情を生きている。反対に、他者に「あなどり」の感情をもつ人は、そのシャドーとして自己の「ほこり」を受けとる。あるいは、「あわれみ」と「やましさ」、「つつしみ」と「いたわり」など、自他の荷重量の差異に基づくシャドー・オペレーションのパターンは様ざまである¹⁸⁾。

そのうちカルトの入信勧誘システムで重要になるのは、自己の荷重量を減少させて他者の荷重量を増加させる動作である、「崇拜」と「自己犠牲」ないし「卑下」のシャドー・オペレーションが鍵となる(図4)。自己を卑しめば卑しむほど、あるいは自己が犠牲を払えば払うほど、その分だけ他者が崇高に見える。反対に、他者を崇めれば崇めるだけ、自分が卑しいように思えてくる。「崇拜」と「自己犠牲」は、自己の余剰を減らして他者の余剰を引き上げようとする「愛」の荷重動作である。自己における輝きの欠乏(欠如)が、他者の側での偉大な輝きとして経験される。「崇拜」と「自己犠牲」は、互いにシャドーとして自動的に発生する感情体験である。カルトの入信勧誘システムは、勧誘された者に「自己犠牲」を払わせるよう誘導することで、そのシャドーとしての教祖のカリスマがリアルになる構造をもつ。

18) 木村は、「憐憫」「尊大」「侮蔑」「謙遜」「欲望」「賞賛」「卑下」「嫉妬」という8個の荷重動作を頂点とし、「優位」「劣位」および「差異化」「平等化」の相を面とする立方体モデル「感情のキューブ」によって、シャドー・オペレーションを含む人間感情のダイナミックスを分析している[木村 1993:2000]。「感情のキューブ」は、感情のモデルであると同時に、荷重差に同一化するダイアドのコミュニケーション・モデルとしても適用できる。

図4 卑下と崇拜のシャドー・オペレーション



教えの難解さも、真理の荷重量を高める装置となる。統一教会の「原理」の内容は、きわめて難解である。教えを理解できない信者は、「理解できないのは努力が足りないからだ」、あるいは「信仰が足りないからだ」と考える。「卑下」の感情である。自己卑下は、対象との関係において自己を劣位化する否定的な荷重動作である。そして、「卑下」は反対称変換として他者への「崇拜」を生む。難解さが真理の有り難さを高めるといふシャドー・オペレーションである。

カルトに限らず、宗教的真理の表現には全体把握不可能性という性格がある。ヨアヒム・ヴァッハは、「われわれは究極的实在のことを測り知ったり理解したり推論したりできないという確信、つまり、“有限なる者は無限なる者を把握しえない” finitum non capaxinfiniti という確信が宗教思想家の間に広く行き渡っている」[Wach 1958 = 1999:87]と指摘している。真理は、そのものとして与えられるのではなく、つねに「啓示」として垣間見るほかないものである。全体把握不可能性という神秘のヴェールに包まれることによって、真理はいっそう輝いて見える。

真理の把握不可能性は、真理の不在を意味しない。橋爪大三郎は、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論に依拠して、原始仏教を「悟りを訊ねあうゲーム」ととらえ、つぎのように述べている。

この言語ゲームは、悟りが確かに実在するというので開始されたわけではないのだ。

むろんこれを逆に読むこともできる。すなわち、“悟りを訊ねあうゲーム”が開始されることで、悟りが「実在」しはじめるのだ、と。悟りは確かにあるのか、誰が悟っているのかは、厳密にはどこまでも不決定のままである。[橋爪 1986:73]

シャドー・オペレーションの論理においては、全体把握不可能性が真理であることの根拠になるだけでなく、真理の真理らしさを高めるようにも作用する¹⁹⁾。

聖なるものの「崇拜」と「自己犠牲」とは、シャドー・オペレーションとして一対になっている。このことは、供犠に関してモースとユベールが指摘した内容に一致する。モースとユベールは、供犠の本質が、犠牲を媒介としての俗と聖の交通にあることをあきらかにした [Mauss and Hubert 1899 = 1983:104-106]。聖なるものは過剰な強度をもつため、ふつうに接触するなら、俗人には強烈すぎて恐るべき目に遭うだろう。供犠における犠牲は身代わりとして祭主の生命を贖う。犠牲を捧げることで、俗の世界に所属する者が破滅することなく聖なるものとかかわりをもつことができるのである。すなわち、聖なるものとの関係は犠牲を必要とするということである。さらにモースとユベールは、犠牲が聖なるものを実在させることをも示唆している。供犠の対象となる聖なるものは「社会的事物」であり、供犠は「社会力」「精神的、道徳的エネルギー」に糧を与える。モースとユベールは、「あらゆる供犠に含まれている自己放棄の行為は、しばしば個人の意識に対して集合的力の存在を想起せしめることにより、まさしくそれらの理想的存在を維持する」 [ibid.:110] という。「自己犠牲」と「崇拜」は、荷重シーソーとして互いに支えあう。

「自己犠牲」と「崇拜」のシャドー・オペレーションがエスカレートすると、自己の荷重量を限りなくゼロに近づけて、大いなる超越荷重体である他者への同一化を目指す「献身のエクスタシー」[木村 2000:89-91] にいたる(図5)。

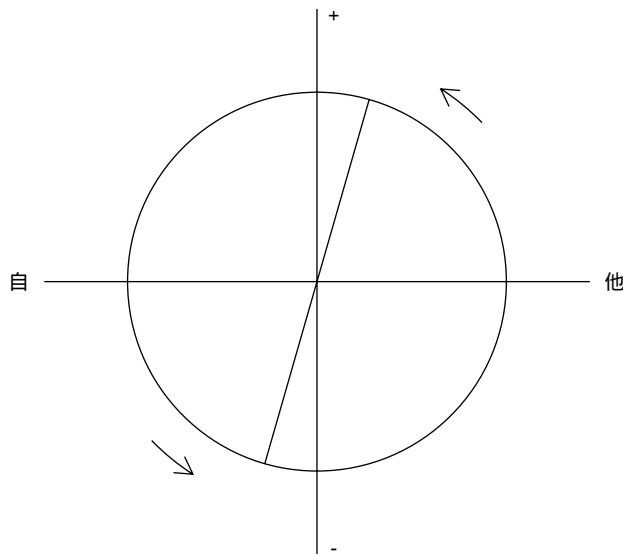
高貴な者、優れた者、美しい者への「崇拜」や賛美、それにとまなう「帰依」と服従といった一体化の運動がこれに相当する。しばしば献身と自己犠牲をとまなうこのエクスタシーは、あまり「民主的」とはいえない愛のかたちであるようにも見えるが、アイドルやスターに対する崇拜や男女の差異への賛美は、こんにちでもごく普遍的で健康な現象である。大義や神への献身、そのために死ぬことへの選択が、エクスタシー

19) 真理の全体把握不可能性は、本来は「直観の記号」や「生成の論理」によるアプローチが適している「生成の世界」[作田 1993]を、全体性を分割して知性の言葉で語ろうとする「定着の論理」によってアプローチしてしまうことに対する戒めだったと考えられる。大いなる生命との一体感や意識覚醒 (mindfulness)、無境界の体験を不用意に言語化すると、かえって体験のリアリティを伝えこなくなってしまうからである。しかし、言語化の難しさに対する謙虚な態度は、意図せざる結果(シャドー・オペレーション)として、「難しいものの有り難さ」というような真理らしさの輝きをもたらす。神秘化である。高尾利数がイエスと後のキリスト教会との関係に見いだした、「宣教する者が、宣教される者になる」[高尾 1996:67]という逆説も、真理らしさのシャドー・オペレーションに由来するのかもしれない。世界宗教の神学を荷重表現論として読み解くことも興味深いテーマである。

と呼ぶしかない「聖なる恍惚」をもたらすことは、歴史的にも経験されてきた。[木村 2000:91]

自己のすべてをささげる「献身」は、大いなる他者（絶対他者）との一体化による神聖エクスタシーを可能にする。献金や神への奉仕は、自己を他者へ捧げるといふ「献身」の荷重動作である。「聖なるもの」は、すべてを要求する。

図5 献身のエクスタシー



愛は確かに、他者のために私の死をめざす私の自由意志であるが、理論的にその「影」として従属と依存の運動をとまなうことが興味ぶかい。君臣の支配服従関係がしばしば愛のモードで生きられ（「忠臣蔵」）、逆に愛が支配と服従のことばで語られる（「あなた好みの女になるわ」）のには、それなりの合理的根拠がありそうである。どちらも自他の二重の意志を「ひとつ」にする、あるいはひとつに成ることを目指す（本来のエロスの）運動である、という点で同じなのだ。[木村 1993:14]

入信勧誘システムの最終段階は、全財産を教会に捧げて神に仕える「献身」の誓いである。ここでは、財産ばかりでなく、写真やアルバムをはじめとして過去の持ち物をすべて処分する。こうして入信過程が一段落する。けれども、入ってから帰還不能点は累積しつづけると考えるべきである。袋綴じされた意味世界（セミオス）から抜け落ちないためにも、帰還不能点を累積しつづける必要がある。

希望と絶望に閉じられたセミオスのなかでは、神をリアルに感じるという「神体験」をすることで、救済の希望は高まる。あるいは、伝道がうまくいかなくて「サタンのささやき」を耳にすることもあるかもしれない。サタンによる墮落への導きは、地獄のリアリティとして感じられる。信仰者たちは、微小荷重の振動によって救済と地獄の間を揺らぎながら、セミオスを生きていく。セミオスは、救済・地獄の過大評価と世界選択のリスクの過小評価とが相互連結された世界である。

帰還不能点累積システムは、セミオスに人を引き込むことで「私」の物語を転換する装置となる。セミオスにおいて、信仰者としての「私」の物語が紡がれる。セミオスの外に捨て去ったモノへの執着が強ければ強いほど、それらを捨てて生まれ変わった「私」へのしがみつきの強くなるだろう。捨てたモノの荷重量が、もう後には戻れない（帰還不能）という予期をリアルにするからである。

ところで、「笑い」は荷重をキャンセルする生理的メカニズムと考えられる[木村 1983] したがって、累積された帰還不能ポイントも「笑い」によってリセットされるといえるのである²⁰⁾。ひとつ例を示そう。統一教会だけでなくオウム真理教でも、出家するときには過去の持ち物を処分させられるが、元オウム信者の高橋英利氏は、教団につながとめられていた理由を、つぎのように話している。「オウムに入ったときには、僕はそれまでの写真を入れていたアルバムを全部焼きました。日記も焼きました。彼女とも別れました。全部捨てているんです」[村上 1998:199]。これに対して、インタビュアーの村上春樹は、「だってまだ二十歳ちょっとでしょう。まだまだやりなおせる歳だし、失礼な言い方もかもしれないけれど、捨てると言ってもそんなにたいしたものはないんじゃないかと思うんだけど」[ibid.:199]と突っ込んでいます。この突っ込みに笑うことができれば、帰還不能点の荷重はキャンセルされるだろう。このインタビューのときには、高橋氏は「まあたいしたものには映らないかもしれませんが……（笑）」[ibid.:199]と笑って答えている。脱会した今だからこそ、過去のこととして笑えるということもあるかもしれないが、むしろ笑えたから脱会できたということもできる。

とはいえ、いったん希望と絶望に閉じられた意味世界（セミオス）に入り込むと、救

20) バフチンは、中世の祝祭の「笑い」についてつぎのように述べている。「中世の人々はこの笑いの中にまさに恐怖に対する勝利を特に鋭敏に感じていた。この勝利は神秘的な恐怖（《神の畏怖》）や自然力への怖れに対する勝利であるだけではない。さらに、何よりもまず人間の意識に枷をはめ、圧迫し、濁らせる精神的恐怖に対する勝利である。つまり、神聖化されたものと禁止されたもの（《マナ》と《タブー》）、権威主義的な戒律・禁止、死や死後のむくい、地獄、大地よりももっと恐ろしいものすべてに対する勝利なのである。この恐怖に打ち克つことによって、笑いは人間の意識を明解にし、世界の展望を新しくするのである」[1973:83]。希望と絶望に閉じられたセミオスを無化する「笑い」の機能が示唆されている。 1965 =

済・地獄の過大評価とリスクの過小評価により、抜け出すことは簡単ではない。帰還不能点累積システムは、網に入った魚を逃さないよう、かなり巧妙な仕組みにできている。

3 親・子・カルトのトリオン・ネットワーク

3.1 ネットワーク・ダイナミックス

帰還不能点累積システムは、「かえし」を呑み込むごとに入信への道から外れることが難しくなるように組み立てられている。しかし、カルトの入信勧誘過程において実際にはすべての人が勧誘されてしまうのではなく、釣り針をはき出して去っていく人たちも少なくない。カリスマを中心とする緊密なカルト集団に人びとを組み込むためには、どのような条件が必要となるだろうか。カイヨワは、カリスマ権力が実際に効力をもつための条件として、特定のポイントに力を加える操作が必要であることを指摘している。

接触もせず媒介物もなくしてさまざまな作用を生み、その結果として、いわば事物を完全にしかもたちどころに従順にしてしまう可能性が呪術と呼ばれるならば、どのような権力もすべて一つの現実的な呪術である。ところで、事物そのものは従順なのではなく、それを動かすためには力が必要であり、力のためには力を加える点が必要になってくる。従って魔法使いの呪文も、それにもっと確実な何かの操作が加わらないかぎり効果を表さないだろう。ところが人間は事物よりも従順である。つまり言葉だとか身振りで大勢の人間たちを手に入れることができるのだ。一つの実験としてこれほど今日的なものはないだろう。呪術、それは事物にも人間にも命令することができるという観念である。[Caillois 1964 = 1990:186]

シャドー・オペレーションによる意味世界（セミオス）の裏返しを実現するためには、そこを押せばネットワークの関節を外すような「つぼ」に楔を打ち込んでこじ開けていく介入が必要になる。希望と絶望によって閉じられたカルトの意味世界に引き込むためには、ネットワークを作動させるポイントに力を加える必要がある。ソシオン・ネットワークの視座からすると、このネットワークへの介入の鍵となるのがトリオン動作である。

トリオンとは、3者間関係において、ひとりひとりが作る3人の世界のことである。ネットワークの結び目としての個人が自他の像を「くり込み」「くり出す」動作の反復によって、社会ネットワークはダイナミックに自己組織化する。木村によると、「ソシオンは、内部にくり込んだサブソシオンを連結させて、自他の関係制御のためのモデルを構成する。その内部モデルの荷重変換動作によって、関係に対する一定の予期（期待やおそれなど）

が発生する」[木村 1999:68]という。トリオンとは、個人の主観的世界（Subject World = Sub-World）に構成された3者関係のモデルである。

それぞれの主観的世界（サブジェクト・レベル）に構成されたトリオンは、行為にくり出されることで、オブジェクト・レベルでの変化を駆動する。トリオンは、正（positive = P）か負（negative = N）の荷重によって連結し、直列結合および並列結合のトライアド荷重演算論理にしたがって、P3個かN2個のときにループが安定する。P2個のパターンは不安定であり、安定パターンへとシフトする傾向がある。フリッツ・ハイダーのバランス理論においても、トライアドで、P3個かN2個のとき安定することが定式化されている [Heider 1958 = 1978:255]。なお、トライアドに関するハイダーのバランス理論とソシオン（トリオン）理論の決定的な違いは、ハイダーがオブジェクト・レベルでのトライアドの安定・不安定のみを問題にしているのに対して、ソシオン理論では、オブジェクト・レベルだけでなくそれぞれの主観的世界（サブワールド）で構成されるトリオンも含んだ多重交叉コミュニケーションに焦点を合わせる点にある。鏡像帰還による多重階層交叉の分析こそが、ソシオン理論の肝だからである。

カルト入信過程においては、トリオンのネットワーク動作が進路を左右する分岐点に作用する力となる。比喩的にいうと、帰還不能点累積システムが魚を捕らえる（「人を漁る」[マタイ 4:19]）仕掛け網（まさに「ヤナ」）であるとすれば、トリオンのネットワーク・ダイナミックスは仕掛けに向かう川の「流れ」にあたる。カルト入信・脱会をめぐるトリオンの動きを事例に即して見ていこう²¹⁾。

3.2 事例Y

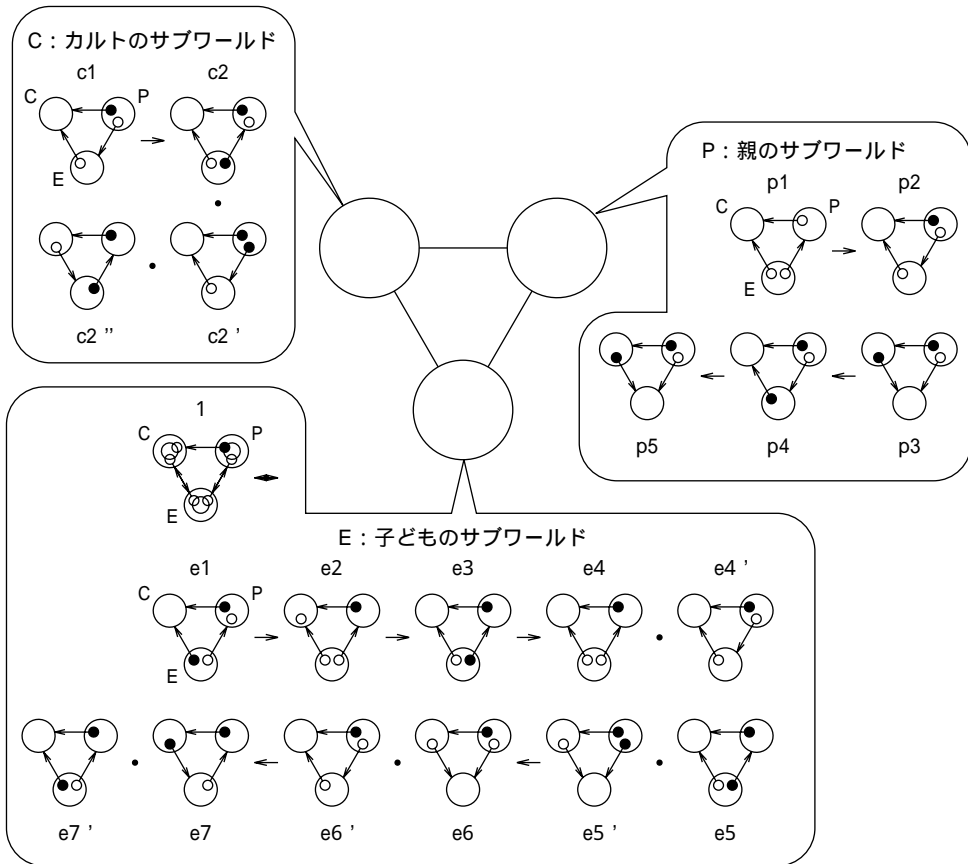
Yさんは、統一教会で6年間信仰生活を送った後、救出カウンセリングによって脱会した²²⁾。Yさん本人とYさんの父親からの聞き取り調査をもとに、入信から脱会にいたる過程をトリオグラフによって記述しよう（図6）。トリオグラフは親・子・カルトの3者関係のトリオン構成を視覚的にわかりやすく表現したものである。図の中央付近に位置する3個のマルがそれぞれ、親（Parent = P）、子（Ego = E）、カルト（Cult = C）のオブジェク

21) 本稿では、カルトをめぐるトリオン・ネットワークを、親・子・カルトの3項に設定し、子どもが入信するケースを取り上げている。若者のカルト入信は目立つものの、もちろん、カルトに入信するのは、未婚の若者だけとはかぎらない。だから、ケースによってトリオン構成は、妻・夫・カルトになったり、兄・妹・カルトの3項になったりするだろう。ただし、いずれの場合も、カルトの対抗勢力として三角形の1辺を構成するのは家族であると考えられる。家族とカルトの対抗関係（あるいはモデル＝ライバル関係）がネットワーク動作を規定する要因となるからである。

22) Yさんへのインタビューは、1999年3月～9月の間に合計4回おこなった。また、Yさんの父親には、1999年8月に1回インタビューした。インタビューした時期は、Yさんはまだ脱会後のリハビリテーション段階だった。

ト・レベルでの相互作用を表す（入信の行為主体となる子どものネットワーク動作を中心に
見ていくため、子どもをegoとする）。中央の3個のオブジェクト・ソシオンから出ている
「吹きだし」は、それぞれの主観的意味世界（サブワールド）を表す。サブワールド内の
トリオンは、各々が主観的世界のなかに構成した3者関係モデルである。

図6 事例Y



注：中央の大きなマルの三角形は、オブジェクトワールドのトライアドを表す。サブワールドの小さなマルの三角形は、主観的世界にくり込まれたトライアド（トリオン）を表している。

大学を出て会社勤めをしていたYさんは、大学時代の友だちから姓名判断の占い師を紹介されたのをきっかけとして、統一教会と出会った。Yさんは、最初はすこし怪しいと疑

っていた。母親に相談したが、ともかく会ってみることにした。友だちに連れられて、占い師と会うためにビデオセンターを訪ねた。ビデオセンターでは、最初にアンケートを書かされる。質問項目のひとつに貯金額を記入する箇所があり、Yさんは、何かおかしいと思って貯金額を少なめに記入した。その後、占い師と会って、姓名判断をしてもらう。Yさんは、そのときの印象をこう語る。

Yさん「占いの内容に関してはピンと来るものがなかった。でも、姓名判断の先生の人柄はよかった。そこは人生について真面目に考えるところのようで、それまでは怪しいのではないかと疑っていたが、疑っていてごめんなさいと謝った。」

それで、Yさんは誘われるままにビデオ講座の受講を決めた。しかし、その場で講習料の支払いを求められて、また不安になったという。それで、お金を払うのは先延ばしにしてもらって、ビデオセンターに通う約束をした。

最初の出会いの段階で、Yさんは、姓名判断の占い師を疑い、母親に相談している。このとき、Yさんのサブワールドで構成されるトリオンは、(e1] N:E C、P:E P、N:P C] (NPN安定)となっている(Pは正の荷重、Nは負の荷重を表し、は送り込まれる荷重の向きを示す)。ただし、この時点では母親もカルトの実態についてよく知らないので、カルトに対して親が付与する負の荷重N:P Cはそれほど強くない。そうして疑いながらも占い師と会ったYさんは、その人柄やビデオセンターの雰囲気から惹かれる。カルトに惹かれることで、カルトへの正の荷重増分+ W:E Cが備給され、トリオンは(e2] P:E C、P:E P、N:P C]のPPN不安定型になる。人柄に惹かれつつも、ビデオ受講料をその場で支払うことを求められると、ふたたび警戒するなど、Yさんは統一教会に対して魅惑される感情と疑いの感情の間で揺れている。P:E CとN:E Cの間でトリオンが振動するが、結局は友だちと約束してビデオセンターに通うことを決めた。

ビデオ講座のことは、親には話さない。統一教会では周囲からの反対を避けるために、ビデオセンターに通うことを親や友だちには話さないように指導する。これは「黙止行」と呼ばれる。ここで学ぶことはとても重要なので、ふつうの人に話しても理解されないかもしれない。だから、家族や友人には話さずに、まずは自分で勉強した上で判断するのがいいといわれる。Yさんも「統一教会の人から親にはいわないようにと指導された。それまで親に嘘をついたことがなかったので、はやくいいかった」という。

ビデオセンターに通うようになったYさんは、「ビデオの内容にはピンとは来なかったけど、早く先を知りたくて通った」という。ビデオの内容は、戦争や社会問題など人間の悪についてのものや、聖書の内容に関するものだった。約1カ月のビデオ講座を受講した

後、2日間のセミナー合宿（2デイズセミナー）に参加する。このセミナーのなかで、再臨のメシアがすでに地上に降りていることを知らされる。だが、Yさんはまだこの時点でも、完全には信じていない。「神さまは信じていたが、メシアには違和感があった」という（この時点では、メシアが文鮮明であることは、まだ証されない）。

そんなふうに、まだ完全には信じていなかったけれども、ビデオセンターやセミナーは楽しかった。Yさんは、統一教会のメンバーとのつながりにしだいに引き込まれていく。

Yさん「霊の親が聖書カバーを作ってくれて、自分のためにそこまでしてくれることがうれしかった。周りの人のやさしさに触れた。真剣に人の話を聞いてくれるところが、統一教会の魅力だと思う。そのような人たちがいうことだから、メシアの話も嘘だとは思わない。メシアは誰だろうと思った。」

ビデオセンター講座が終わって、つぎは中級トレーニングと呼ばれる教育課程に入った。中級トレーニングのとき、再臨のメシアが文鮮明であることを証された。

Yさんはずっと、親にはカウンセラーの勉強をすると嘘をついていた。親に嘘をつくのは、もし統一教会に入っていることが知られると、親はきっと反対するだろうと予想されるからである。Yさんのサブワールドで、しだいに、(e3)[P:E C、N:E P、N:P C]（PNN安定）の回路が回りだしていた。

一方、Yさんの父親は、まだ娘が統一教会に入っていることに気づかなかった。

父親「なんか、カウンセリングの方の受講したいという希望が出てきてたんですけども、ま、それぐらいならやってもいいんじゃないかという考えは持っていました。」

中級トレーニングの後、4デイズセミナーに参加し、さらに泊まり込みで統一教会の教えを勉強する新生トレーニングが始まった。この頃から、家族はしだいに疑いをもち始めたようである。Yさんは、「母親は信じ込んでいたが、父と妹は怪しがっていた」と思っていた。しかし、父親の話では、この時点でもまだ気づいてはいなかったようである。「すぐ気がつかなかったと思いますね。それで、ま、後からそうすると何かいろいろテレビで出てるあれのことかなって気がついて。それでびっくりしたんですけど」と父親は話す。父親のサブワールドでは、娘がカウンセリング講座を受講することは反対すべきこととも思われなかったので、この時点でのトリオン構成は、(p1)[P:E C、P:P E、P:E P]でPPP安定パターンである。子どもの描くトリオンと父親のトリオンの間には、このようにズレがあった。トリオンは、それぞれの主観的な意味世界に構成されるものだからである。

新生トレーニングの途中で、Yさんの知り合いを通じて、家族はYさんの通っていると

ころが統一教会だと知った。新生トレーニングを終えると、つぎは実践トレーニングが始まる。実践トレーニングからは、布教伝道に従事するようになる。伝道にはノルマがあるので、いままでのトレーニングよりも厳しく、Yさんはほとんど家にも帰らないようになった。

父親「間違いなくその、彼女は統一教会に行っているんでしょうと。それでちょっと気をつけないとまずいですよというのがあったわけです。そうしたところ、18日頃ですか、その髪をこう短くしたんですよ。それで明らかにそういうイメージが変わってきましたし、間違いなく入ったなということをそれで気がついたっていうか、わかったっていうこと。ということが、ま、そういうことにかかわりがあるっていうことに、ま、気がついたと。でもその対処する処置をどうすべきかっていうことを、あんまりこちらもそういうことに疎かったんでね。」

父親は、娘が統一教会に入ったと知って、何とかしなければいけないと思ったが、どうすればよいのかわからなかった。どうしようかと思案していたところ、妻の知り合いが統一教会問題に詳しいというキリスト教の牧師を紹介してくれるという話になった。

父親「そのうちに、その、ま、おつきあい、ま、うちの方の関係でおつきあい、女房がおつきあいしている関係で、ま、非常に怖い宗教ですよ、と。そのお友達の方がやっぱり、そういうことで、あの、苦労されたことがあって、その方からK教会のF先生という人がいて、その方の指導を受けたらどうですかってことで、その方を紹介してくれるということになりました。」

それで、教会に相談に行つてF牧師に相談した。父親はそこで牧師から、統一教会が危険な洗脳団体であることを聞かされた。F牧師は、娘を救うためには、どこかに隔離して脱マインド・コントロールする必要があるといい、ウィークリーマンションを紹介してくれた。「保護」による救出カウンセリングである²³⁾。牧師の話聞いて、父親は「保護」を実行しようとして覚悟を決めた。父親のサブワールドでのトリオン構成は、(p1)[P:E C、P:P E、P:E P]のPPP安定型から、カウンセリング講座ではなく、怪しいカルトだと認識したので、(p2)[P:E C、P:P E、N:P C]へとシフトする。この状態はPPNの不安定であるが、さらに、統一教会が信者を洗脳しているということを知ると、統一教会は純粋な宗教のふりをして娘の信仰心を利用し、献金を巻き上げようとしているのだと思う。そ

23) 救出カウンセラーの間では、子どもを統一教会から引き離して、自宅以外のマンションで生活することを「保護」と呼んでいる。「保護」したマンションで家族といっしょに生活しながら、脱会するよう説得をくりかえすが、一般的な統一教会信者の救出方法になっている【渡邊 2000】。

うして、(p3)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)で荷重ループがまわりはじめ、悪いカルトに娘は騙されているという構図が親にとってのリアリティとなる。このサブジェクト・レベルにおけるトリオン図式にしたがって、親は娘を救出する行為(オブジェクト・レベル)を実行する。

父親がウィークリーマンションを借りて、家族で「保護」のリハーサルまでやった。ところが、いざ実行しようという3日前になって、娘が突然家に帰ってきた。それで結局、「保護」は中止にして、しばらく様子を見ることにした。

父親「本人が、ま、ぱっと帰ってきたんですよ。完全にやつれた、こうげっそりとしてね。それでも、まあとにかく本人が帰ってきたからまあ、よかったよかったということで、ほっとして、ええ、じゃあ、ちょっと、体調崩しているようだから病院で診てもらってきなさいってということで、行って診てもらった結果、まあちょっとした疲れじゃないですか、まあ休めばいいだろうってということで。」

じつは統一教会では、Yさんが家族から信仰に反対されているのを危惧していた。カルトのサブワールドでのトリオンは、(c1)[P:E C、P:P E、N:P C]のPPN不安定である。そこで献身する前に、Yさんに家に帰って様子を見るよう指示した。家に帰ったYさんは、父親の鞆からウィークリーマンションの契約書を見つけた。「保護」を狙っていることに気づいたYさんは、アベル(統一教会の用語で信仰上の先輩を意味する)に相談した。アベルは、親を安心させるために、いったん家に帰るようにいった。

Yさんが家に帰ってきたことで、家族は安堵した。統一教会から離れたと思ったのである。父親のトリオンは、(p4)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)という望ましい状態になる。ところが、実際にはYさんは統一教会をやめてはいなかった。活動は控えていたが、統一教会のメンバーとは定期的に電話で連絡をとって、献金はつづけていた。もちろん、親には内緒だった。

活動はせず献金だけする信仰生活が約5年つづいた。もう家族も安心しただろうということで、YさんのアベルはYさんに独り暮らしをするようすすめた。それで、独り暮らしを始めた。

じつはその頃には、親もYさんがまだ統一教会とかかわっていることに気づいていて、なんとかしようと考えていた。知り合いから紹介されて、K教会とは別の救出活動団体(救出カウンセラーN氏を中心に、牧師・元信者らのボランティアからなる)の勉強会に参加するようになる。前に相談したK教会は、すぐに「保護」しようというやり方だったが、この救出活動団体では、まず親がじっくりと救出の心構えや統一教会の恐ろしさを勉

強した上で、準備万端整ってから「保護」するという方針だった。Yさんの父親は、そこではじめて事の重大さを認識したという。

父親「それで、ものすごい、ま、人数が、わっという、ま、すごい真剣な顔でいろいろ聞いて、もう、その熱気に、まあ、じつは圧倒されてですね、それで、この統一教会っていうのは、たいへんなことをやっているっていうのを、今さらながらそこでまた再認識したような格好なんですね。だから、それまではいろいろテレビで騒いでいても、そんなに身近に問題点を感じなかったんですね。本も読んでいなかったわけですから。」

Yさんの両親は熱心に統一教会の教えや、救出方法についての勉強を始めた。勉強会では、統一教会信者はマインド・コントロールされて、教団から搾取されていると学ぶ。(p5)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)のトリオン回路が作動する。こうして、子どもは騙されているという憤りの感情が増幅されていく。親の目から見れば、なんとしても子どもを救出しなければならぬと感じられる。子どもがカルトに惹かれている状態のトリオン構成(p2)[P:E C、P:P E、N:P C]は、子どもが騙されているというトリオン構成(p5)[N:C E、P:P E、N:P C]にシフトすることで、安定したループを回ることができる。安定ループで荷重が備給されることによって、「騙されているに違いない！」というリアリティは強固なものとなっていく。

ところで、その頃はYさんはまだ活動を控えている時期だった。あるとき、Yさんは家族の留守中に家に戻って、また父親の鞆を調べていたら、救出活動団体(統一教会反対集会)の書類を見つけてしまった。そのときの気持ちについて、Yさんはこういう。

Yさん「そのときは統一教会に通うのをがまんしていたのに、それなのに親が勝手に私が統一教会に通っていると思って反対集会に出るのだったら、統一教会に通った方がいいじゃないかと思った。親のやり方にキレて統一教会にまた通うようになった。」

教会に通うのをがまんすることは、Yさんのサブ・ワールドでの(e4)[P:E C、P:E P、N:P C](PPN不安定)という不安定なトリオン構成をもたらす。カルトに惹かれながらも、親が心配してくれていることも感じるから、無茶はできない。(e4)と連動して、(e4') [P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)の回路にも荷重ループが生まれる。Yさんにとっては、カルトを信じながら、カルトに反対する家族との仲もうまくやっていくための苦肉の策だった。(e4)と(e4')の間で振動する不安定なループは、感情体験の不安定さとして経験される。

しかし、父親の鞆から救出活動の集会の書類を見つけたとき、Yさんは裏切られたと感じた。この一件によって、Yさんには親に対する不信・不満をもった。Yさんのトリオン構成において、(e5)[P:E C、N:E P、N:P C]というPNN安定型の回路ができる。この回路で荷重が備給されると、親に対する不信が増大すればするほど、カルトの輝きが増す。さらには、同じ回路の反対方向からのループとして、カルトを崇めれば崇めるほど、親が信じられなくなるという、相互増幅的ポジティブ・フィードバック・ループが完成する。さらに、この回路は、(e5')[P:E C、N:P E、N:P C](PNN安定)と連動する。Yさんは、親が世間体を気にして、自分の信仰を認めないのだと思う。親は子どもの幸福よりも、世間体を優先しているように見える。親からの愛情の欠如(-W:P E)を感じるのである。こうして、Yさんは統一教会へどんどんのめり込んでいった。

5年ぶりに教会に通うようになったYさんは、「通えなかった期間が信仰を強めた」という。そして、海外宣教、「祝福」(合同結婚式)にも参加した。このとき、カルトのトリオン(c2)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)と子どものトリオン(e5)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)は一致し、親を蚊帳の外に置いて、オブジェクト・レベルでのリアリティが確立される。また、教えの上でも、「肉の親」より「霊の親」を優先することが説かれる。親の愛は世俗的なもので、神の愛に対して妨げになるため、ほんとうの愛ではないのだといわれる。(c2')[P:E C、N:P E、N:P C](PNN安定)のループである。そして、信仰生活のなかで神からの愛をリアルに感じることで、親の愛はますます空虚なものに思えてくる。そうすると、親に対する負の荷重が備給され、(c2")[P:C E、N:P E、N:P C](PNN安定)のループで安定する。(c2)∧(c2')∧(c2")の回路でトリオンのパターンがロックすると、信仰は確固としたものになり、容易に抜けられなくなる。

ますます熱心に信仰するようになったYさんに対して、父親は再び救出カウンセリングを決意した。秘密裏に計画をすすめていたつもりだったが、こんどもまたYさんに見破られてしまう。Yさんは、こっそり留守中の家に帰り父親の部屋を調べて、合同結婚式に参加したことを伝える報告書を見つけた。危険を感じた統一教会は、Yさんにしばらくアルゼンチンで海外宣教に従事するよう指示した。年の暮れだったので、年末年始を家族と過ごして、年明けにはすぐアルゼンチンへ向かう予定だった。

家族はYさんの職場の同僚から、Yさんが仕事を辞めたことを聞いて、Yさんが海外宣教に行ってしまうことに気づいた。救出カウンセラーと相談して、年末にYさんが家に帰ってきたとき、「保護」を強行することにした。

救出カウンセラーによると、カルトのマインド・コントロールを解くためには、子ども

をカルトから物理的に隔離して「保護」する必要があるという。親戚の協力を得て、力づくで本人を「保護」して、外出を禁止する。そこで家族と共同生活を営みながら、信者に自分の頭で考えられる環境を作ってあげる。以前は自宅でおこなわれていたが、自宅だと信者仲間がやってきて、家を取り囲んで声援を送って説得を妨害するので、自宅での「保護」はおこなわれなくなった。ホテルやアパートも利用されたが、現在ではマンションの一室を借りておこなわれるのが一般的になっている。「保護」の場で説得を繰り返し、信仰が間違이었다と納得させた上で脱会させる。

「保護」されたとき、Yさんはつぎのように思ったという。

Yさん「家に帰ったときはふつうに迎え入れられて。お風呂に入って出てきたところ、親戚が集まった。しまった、と思った。家に帰る直前に父に電話で、拉致・監禁を計画していないよね、と尋ねた。父はしていないとってたんです。それなのに、やられたって。」

信者にとって、「保護」は信仰を妨げるサタンの仕業と考えられる。つかまった時点で、親に対する負の荷重が備給され、- W:E Pは極大化する。

Yさん「みんながしめしあわせてやっているんだと思い込んでいた。拉致・監禁はしないと嘘をついた親を恨んだ。」

子どもは、親に騙された、裏切られたと感じる。そのため、多くの場合、「保護」して3日間くらい、信者は感情的になって話し合いもまったくできない。感情的な反応がおさまって、すこし落ち着いた様子が見られると、家族での話し合いが始まる。

最初は家族だけでの話し合いだが、それでは埒が明かないということで、統一教会に詳しい牧師や救出カウンセラーN氏が話し合いに加わる。救出カウンセラーN氏は、統一教会の問題点や組織の裏側、文鮮明の経歴詐称、教義のデタラメなどを指摘し、脱会するよう説得する。統一教会では、救出カウンセリング対策教育として、救出カウンセラーや牧師の話を聞かないように信者に指導している。救出カウンセラーはサタンの手先、あるいはサタンそのものだといわれる。だから、最初は説得に耳を貸そうとしない。

Yさん「説得する人たちの話を聞いてはいけないと思っていた。なんでこんなことをするのですかと突っかった。すごく威圧的な雰囲気だった。みんながいっしょになって責めてくると思った。すごくこわかった。」

説得しても、話を聞かないし、どれだけ証拠を示されても統一教会を信じているから、救出カウンセラーを信用しない。Yさんは、「証拠は、いろいろ示された。でも最初はそれもデタラメとしか思わなかった」という。また、Yさんは、「両親はこの人たちにだまされ

れている、と思った」という。サタンの手先である救出カウンセラーN氏が親を騙して、こんなひどいことをさせているのだと思った。

救出カウンセリングの勉強会では、「保護」の現場に入ったら家族はなるべく子どもを責めないようにと指導される。子どもが悪いのではなく、悪いのは子どもを騙した統一教会である。だから、愛情をもって子どもを見守ることが大切とされる。家族はあたたかく子どもを受けとめる役割に徹して、説得はもっぱら第三者的立場の救出カウンセラーがおこなう。家族が愛情を示すことで、子どもに対して+ W:P Eを備給する。その一方で、救出カウンセラーが信者は統一教会に騙されているのだということを、いろいろな資料を駆使して説得する。子どものトリオン構成において、- W:C Eの備給を誘導する操作である。この状況で、子どものサブワールドでのトリオンは、(e6)[P:C E、P:P E、N:P C]のPPN不安定になる。この不安定な揺らぎのなかで、カルトとの接触を断たれたまま、カルトへの負の荷重がすり込まれると、しだいにP:C Eへの確信が弱められていく。そうすると、(e6')[P:E C、P:P E、N:P C]における子どものカルトへの正の荷重量+ W:E Cが、親の子どもへの愛情+ W:P Eに比べて小さくなる。ひょっとすると自分は騙されていたのかもしれないと思う。- W:C Eの備給が始まると、信仰は危うくなる。(e7)[N:C E、P:P E、N:P C]のNPN安定に向かって荷重ループがまわり出すからである。Yさんには、統一教会が信者を騙している可能性(N:C E)が、しだいにリアルに思えるようになった。

カルトに対する不信という負の荷重が備給されると、それまでサタンの手先として憎んでいた救出カウンセラーN氏の言葉が、俄然ほんとうらしく思えてくる。[N*N P]という荷重演算論理にもとづくトリオンの安定ループが作動するからである。

Yさん「話を聞くようになるきっかけは信頼。説得している人を信頼できると感じる。

それから聖書を読んで自分で原理と見比べて、自分っておかしいのかなと考えられるようになる。そんなことない、おかしくなっていないと最初は思っている。

親戚、家族にいわれて反発する。でも本当におかしい。」

最初は信じていなかったが、「説得者の真実な姿、真剣に間違いを教えてくれた」ことに心を打たれて、Yさんは説得に耳を傾けるようになった。「この人たちはほんとうに私の気持ちをわかってくれていると感じた。そのときから、話を聞いてみようと思った」という。

Yさん「自分の気持ちをこの人たちはわかってくれている、とわかる瞬間があった。

強引にいつているだけじゃない。ああ、この人たちを信じてもいいんだと思っ

た。それまで聞こえなかったのが、聞こえるようになった。」

カルトへの不信は、救出カウンセラーへの信頼と反対称変換の関係にある。一方への信頼は他方への不信を生む。こうして、いったんカルトへの負の荷重が振り込まれると、カルトへの疑いと不信は増大していき、ついには脱会を決意するにいたる。(e7][N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)と(e7')[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)の荷重ループがまわることで、カルトからの離脱と家族への帰還が確実になる。

「原理」(統一教会の教え)の間違いに気づいたYさんは、さらに説得を手伝う元信者たちといっしょに『原理講論』を読んで、間違いを確認していった。救出カウンセリングでリハビリテーション段階と呼ばれるこの過程は、カルトに対する負の荷重N:E Cを強化するのに有効である。

Yさん「原理は真理だといってる。間違いがひとつでもあったらたいへん。間違いに気づいたときショックを受ける。なんてことだろう、と。つねに真理であるからこそやらねば、と、思ってやっていたのに。たとえば伝道においても、嘘をついて伝道することは、これは真理なら正しいが、真理でなければひどいこと。」

そして、Yさんは、脱会を決意した。こうして、Yさんのサブワールドにおけるトリオン(e7)[N:C E、P:P E、N:P C]が、親のサブワールドのトリオン(p5][N:C E、P:P E、N:P C]と一致する。このとき、統一教会との接触は物理的に断たれているから、カルトのサブ・ワールドのトリオン構成(c2)[P:E C、N:E P、N:P C]は、オブジェクト・レベルに働きかけることができない。救出するのに「保護」が必要とされるのは、このためである。

4 トリオン・シフトとトリオン複合

4.1 トリオンのパターン

Yさんの事例で示したように、カルト入信・脱会は、親・子・カルトの3者関係のパターン・シフトから説明できる。3者間でコミュニケーションが成立するためには、それぞれが3者関係をどう見ているかのモデルを構成し、感じ取る必要がある。それぞれの主観的な意味世界(サブワールド)に、構成された3者関係のモデルがトリオンである。トリオンは、現実の言葉や行為のやりとり(オブジェクト・レベル)を介して、主観的世界に構成されるが、各々の主観的世界におけるトリオンは、つねに解釈の不確かさや意味の揺

らぎ、ズレを含む。ソシオン・ネットワークの荷重動作は、多重な未決定性をもつ²⁴⁾。

ケース・スタディでは、3者間におけるトリオンのズレとすり合わせ、トリオンのパターンが揺らぎや反復をともないながら不安定から安定へとシフトしていく過程、安定したトリオン・パターンに楔を打ち込んで不安定ループを発生させる介入について記述した。トリオンのズレと一致が、3者間での誤解と理解のフィードバック運動を引き起こす。振動と揺らぎをともなうトリオン・コミュニケーションのダイナミクスにおいて、カルト入信・脱会過程の進行を左右するのが、トリオンのパターン・シフトである。

トリオンのパターン・シフトは、入信・家族伝道・脱会・二世信者といった様ざまな条件によって、いくつかの未決定な可能性を許容する。それぞれの場面について、以下に可能なトリオン・シフトを描き出そう。

4.2 入信におけるトリオン・シフト

親、子ども（被勧誘者・信者・脱会者）、カルト（勧誘者・教祖・神）の3者関係のパターン・シフトについて考察する。初期動作、入力・出力、荷重の向き、荷重動作の順序の組み合わせにより、理論的には膨大な選択可能性をもつトリオン・パターンであるが、事例の特殊性によって選択肢の未決定性はそれなりに縮減されると考えられる。厳密な理論化は今後の課題となるが、ここではカルトをめぐるトリオン・パターンのモデル構築を試みたい。図7には、入信のトリオン・パターンを示した。

E：子どものサブワールド（入信）

(1) [P:E C、P:E P、N:P C] (PPN不安定) 「2つの愛の葛藤…」

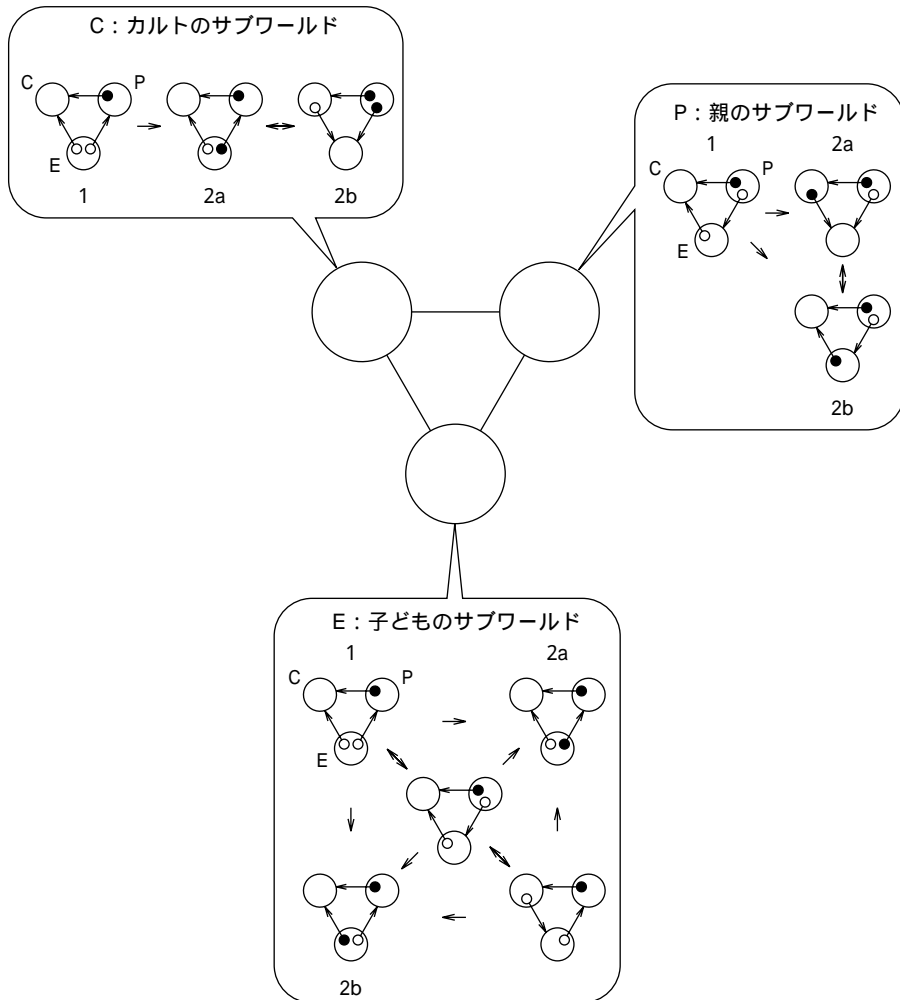
(2a) [P:E C、N:E P、N:P C] (PNN安定) 「信仰ひとすじ！」

(2b) [N:E C、P:E P、N:P C] (NPN安定) 「入信やめた！」

カルトに勧誘された子どもは、入信勧誘システムの段階をすすむうちに、カルトを肯定的に評価するようになる。その一方で、親に対しても正の荷重を振り込んでいる。親はカ

24) ベイトソンは、互いが互いを知覚していることを知覚する「相互覚知」が、メタ・コミュニケーションを構築するという。「相手がこちらを知覚していることをこちらが知っており、相手もこちらが知覚している事実をわかまえている時、この相互覚知は、参加者二人のすべての行為と相互行為の決定因となるのである」[Bateson and Ruesch 1968 = 1995:224]。そのとき、各自の知覚（データのコード化）が同じ場合もあれば、ズれている場合もある。さらに、他者の相互覚知についての知覚も、一致する場合とズれている場合がある。2者関係における荷重ループのズレについて、木村は「ふたつのループの間には、送り手の意図と受け手の解釈のあいだで、つねに確定できない意味のゆらぎが発生する。じつは、このふたつの意味（荷重量）のズレこそが、人間を発語や行為に駆り立てる原動力であり、発生した誤解や思いこみは、人間関係に複雑さと意外性を生み出す情報発生源である」[木村 2000:129] と指摘する。これが3者関係になると、さらに複雑性は増大する。

図7 入信のトリオン・シフト



注：中央の大きなマルの三角形は、オブジェクトワールドのトライアドを表す。サブワールドの小さなマルの三角形は、主観的世界にくり込まれたトライアド(トリオン)を表している。

ルトを反社会的で危険な集団と見ているからカルトを嫌うにちがいない、と子どもは予想する。カルトと親の間で、引き裂かれる状態(1)[P:E C、P:E P、N:P C](PPN)は、トリオン結合として不安定なパターンである。トリオンは安定パターンへとシフトする傾向があるから、子どものサブワールドにおけるトリオン・パターンは、安定を求めて、カルトに対する正負の荷重の間で不安定に揺らぐ。(2a)[P:E C、N:E P、N:P C]と(2b)

[N:E C、P:E P、N:P C]との間で、荷重ループが振動する。このとき、カルトに対する正の荷重増分が親に対する正の荷重増分よりもわずかでも大きい場合、カルトに対する正の荷重増分+ W:E C、親に対する負の荷重増分- W:E P、親のカルトに対する負の荷重増分- W:P Cがそれぞれのループがまわりはじめ、PNN安定に向かう。カルトの教えを信じているのに、そのカルトを批判する親は嫌いだという感情的反応である。そして、この安定ループでは、逆方向の回路も作動する。親に対する反発ゆえに、親が批判すればするほど、シャドーとしてのカルトの魅力が輝きを増す²⁵⁾。

子どものサブワールドにおいて、親への反発とカルトの魅惑が、相互増幅的ポジティブ・フィードバック・ループを形成する。このときトリオンはPNN安定パターンで固着しやすい。いったんこのかたちでトリオン・ロックがかかると、後戻りするのは難しくなる。

P：親のサブワールド（入信）

(1)[P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)「なぜカルトに惹かれるのか？」

(2a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)「騙されてる！」

(2b)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)「マインド・コントロール！」

今日一般に使用されるカルトという言葉には、いかがわしいとか、危険・反社会的といった否定的な意味が含まれている。そうでなくても、出家は家族からの離脱を契機とするものであるから、親はカルトに対して負の感情を抱きやすい。したがって、多くの場合、N:P Cは固定して考えることができる²⁶⁾。

子どもがカルトに近づいていったとき、親のサブワールドでのトリオンは、(1)[P:E C、P:P E、N:P C]でPPNの不安定パターンになる。子どもからの愛情をめぐって、カルトとの間に競合関係が生まれる。本来は親の自分に向けられるべき愛情が、カルトに向けられていると感じられる。ここから、不当な愛情の搾取という感覚や子どもを奪われたという感情が発生しうる。

親の構成するトリオンにおいて、不安定パターンから安定へのシフトとして、2つのパターンが考えられる。まず第1に、(2a)[N:C E、P:P E、N:P C]のNPN安定である。

25) 芹沢俊介が『「イエスの方舟」論』で描き出したのは、初期条件として親子の間に溝があるケース(N:E P)だった。だが、今日のカルト入信をめぐっては、必ずしも初期条件として親子間の葛藤が見いだされるわけではない。むしろ、入信をめぐる相互作用過程において、親子間の溝が深まるケースが一般的である。カルトの勧誘入信システムは、親子間の葛藤を入信へのバネとして(どこまで戦略的かはともかく)利用している可能性がある。

26) 3項のうちの固定的な部分と可変的な部分のヴァリエーションは、事例の特性に応じて異なってくると考えられる。固定性と可変性の組み合わせによって、トリオン・パターンの選択性が制限される。

親は子どもを愛している。親はカルトを嫌っている。この2つの関係が固定されたとき、トリオン回路が安定に向かうためには、三角形の残る1辺の動作はカルトと子どもの間が負の荷重で結ばれることが条件となる。それゆえに、親はカルトが子どもを、じつは騙して献金を巻き上げようとしているのだと考える。親には、子どもがカルトに騙されているように思えてしまう。親・子・カルトのトライアッドで、P:P E、N:P Cが固定される時、三角形の残る1辺はN:C Eになる。子どもが騙されていると親が感じるのは、トリオンの論理において十分な必然性と合理性をもつのである。

第2に、(2b)[N:E C、P:P E、N:P C]のNPN安定である。(2a)との違いは、EC間の負の荷重動作の矢印の向きである。親は子供を愛していて、カルトを嫌っている。三角形の2辺がPとNで固定されているとき、残る1辺はNにならないと安定しない。親は、子どもがカルトに惹かれるのは、本当の信仰としてではなく、カルトにマインド・コントロールされているからだと考える。つまり、子どもは自分ではカルトの教えに惹かれてるように思っているけれど、マインド・コントロールされていることに気づいたらカルトを嫌いになるにちがいない、と考えるのである。親のサブワールドに構成されるトリオンでは、P:E Cは表面的なマインド・コントロールによるもので、ほんとうは子どもがカルトを好きになるはずがない(N:E C)と考えられる。(2b)は、いわば(2a)の裏面にあたる。マインド・コントロールは本物の信仰ではないから、欺瞞に気づけば必ず脱会させることができるという信念は、このトリオン・ロジックに由来する。

カルト信者の親やカルト批判者が使うマインド・コントロール概念には、N:C EとN:E Cの両方の意味が含まれている。カルトが子どもたちを騙しているという(2a)の論理と、子どもたちは本当にはカルトを信仰しているのではないという(2b)の論理の2つである。後者のロジックには、親の方が子ども本人よりも子どものことをよりよく理解しているという暗黙の前提が含まれているため、主体的に信仰しているという子どもの主張と厳しく対立することが多い。(2a)はカルトのマインド・コントロールの恐しさを強調し、(2b)は脱マインド・コントロールの可能性を感じさせる。マインド・コントロール論者は、誰でもマインド・コントロールにかかるということを強調する一方で、脱マインド・コントロールできるともいう。本当の信仰ではないから、P:E CはN:E Cに変換可能と想定されるのである²⁷⁾。

27)たとえば、救出カウンセラーの杉本誠牧師は、「本当に自分が自分で選びとった信仰だったら、キリスト教の牧師の話聞いてやめることはありませんよ。例えば私のところの教会のクリスチャンの青年が隣のお寺のお坊さんの話を聞いてキリスト教をやめるなんてことはあり得ないんですよ」[杉本/名古屋『青春を返せ』訴訟弁護団1993:209]と述べている。マインド・コントロールではなく主体的にカルトに入信したのであれば、救出カウンセリングによる脱会は不可能であるが、カルト入信はマインド・コントロールの結果なのだから、脱マインド・コントロールしてやれば救出できるということである。

C : カルトのサブワールド (入信)

- (1)[P:E C、P:E P、N:P C](PPN不安定)「俗世のしがらみ！」
 (2a)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「親はサタン！」「信仰の妨げ！」
 (2b)[P:C E、N:P E、N:P C](PNN安定)「肉の親より霊の親！」

カルトに勧誘された人が親とカルトの間で迷っているとき、カルトは子どもを親から引き離すことで、安定したトリオンを構成することができる。親子の間に、N結合を作り出すことで安定パターンに向かう。(2a)[P:E C、N:E P、N:P C]のPNN安定である。しばしば「親はサタンだ」といわれる。信仰の妨げになる親は、子どもの幸福を願っていないのだと考えられる。さらに、(2b)[P:C E、N:P E、N:P C]の回路も作動する。「肉の親」(産みの親)が子どもを愛するよりも、「霊の親」(信仰の導き手)の愛の方が深いという教えは、このトリオン動作に由来する。

4.3 家族伝道におけるトリオン・シフト

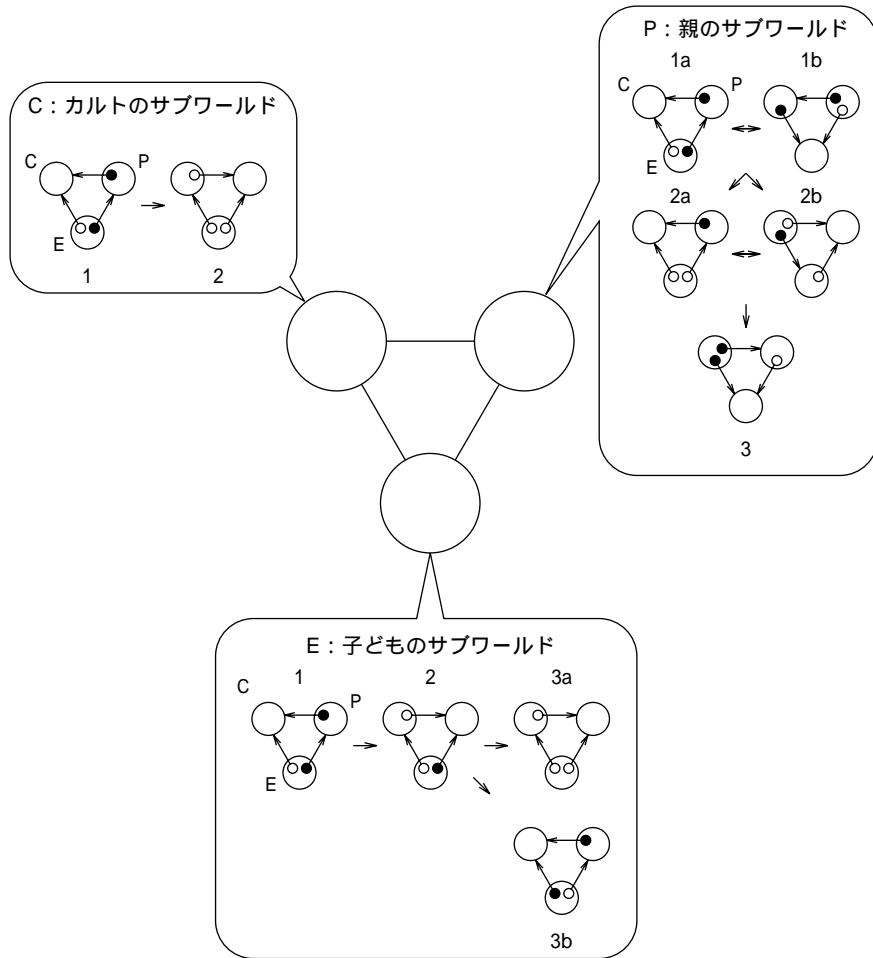
いったん家族のもとを離れてカルトに献身するが、信仰の階梯が高くなってくると、信者の使命として家族を伝道することが求められる。はじめは自分の救いや幸福を得るために信仰の道に入ったとしても、やがて信仰が深まるうちに、自分自身の救いや幸福ばかりでなく他者の救いをも願うようになる。自分ひとりだけが救済されればよいというのではなく、家族の救済も望まれる。図8は、家族伝道におけるトリオン・パターンを示している。

E : 子どものサブワールド (家族伝道)

- (1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「信仰ひとすじ！」
 (2)[P:E C、N:E P、P:C P](PNP不安定)「家族を伝道しよう！」
 (3a)[P:E C、P:E P、P:C P](PPP安定)「家族伝道成功！」
 (3b)[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)「脱会！」

家族への伝道を試みようとするとき、子どものサブワールドのトリオン構成は、(1)[P:E C、N:E P、N:P C]のPNN安定から、(2)[P:E C、N:E P、P:C P]のPNP不安定へと移行する。親から引き留められるのを蹴ってカルトに入ったのに、その親を救いの道へと導かなければならない。この不安定さは、一種の後ろめたさの感情として経験されるかもしれない。

図8 家族伝道のトリオン・シフト



注：中央の大きなマルの三角形は、オブジェクトワールドのトライアドを表す。サブワールドの小さなマルの三角形は、主観的世界にくり込まれたトライアド（トリオン）を表している。

(2) のトリオンからの移行として、伝道が成功して家族全員で信仰の道に入る(3a) [P:E C、P:E P、P:C P] (PPP安定) のパターンか、あるいは、伝道しようとしたところ反対に説得されて脱会にいたる(3b) [N:E C、P:E P、N:P C] (NPN安定) のパターンが可能である。

P：親のサブワールド（家族伝道）

- (1a) [P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「親を棄てて信仰の道に…」
(1b) [N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)「マインド・コントロール！」
(2a) [P:E C、P:E P、N:P C](PPN不安定)「なぜカルトに惹かれるのか？」
(2b) [N:C E、P:E P、P:C P](NPP不安定)「家族に伝道？」
(3) [N:C E、P:P E、N:C P](NPN安定)「家族を騙そうとしている！」

親は、子どもが自分たちを捨ててカルトに走ったとってしまう。親のサブワールドでのトリオンは、(1a)[P:E C、N:E P、N:P C]のPNN安定である。その一方で、子どもはカルトに騙されているのだとも思う。それゆえ、(1b)[N:C E、P:P E、N:P C]のNPN安定トリオンも構成される。

子どもが家族伝道に来ると、(2a)[P:E C、P:E P、N:P C]のPPN不安定トリオンが発生する。子どもが、カルトだけでなく家族にも愛情を示すことにより、Pが2個になってトリオンが不安定になる。また、カルトが家族の救いを願っているというトリオン構成(2b)[N:C E、P:E P、P:C P]はNPPで不安定である。カルトの家族伝道は、親にとって不可解に感じられる。カルトが家族も騙そうとしていると考え、(3)[N:C E、P:P E、N:C P]でNPN安定になる。家族伝道において、親のサブワールドに構成される不安定なトリオン・パターンは、子どもの救出か、あるいは勘当か、いずれにせよ新しい展開を生み出すことになるだろう。

C：カルトのサブ・ワールド（家族伝道）

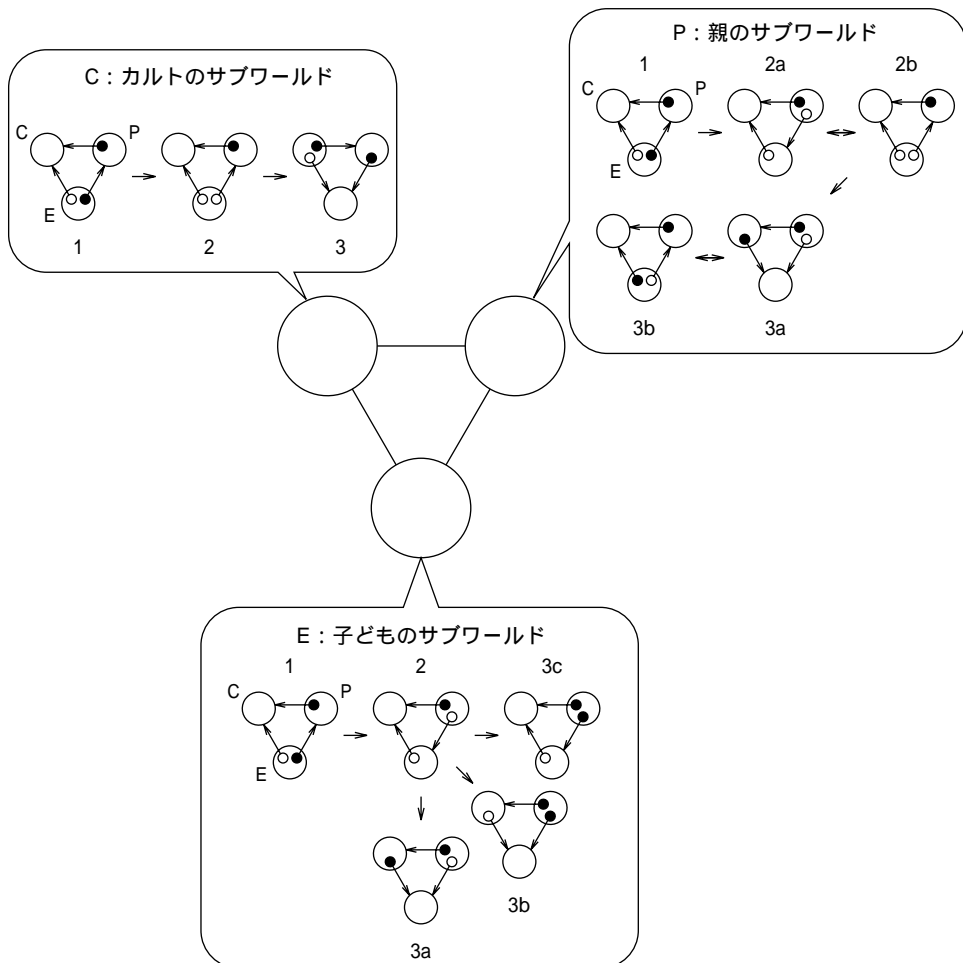
- (1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「肉の親より霊の親！」
(2)[P:E C、P:E P、P:C P](PPP安定)「自分だけでなく家族の救いも！」

カルトのサブワールドでは、当初は(1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)であるが、救済は万人に開かれるべきものであるから、(2)[P:E C、P:E P、P:C P](PPP安定)への移行が望ましい。

4.4 脱会におけるトリオン・シフト

カルトが話題になるときは、入信に関心が集中する傾向にある。だが、今日のカルト現象では、入信だけでなく脱会も重要な問題である。カルトへの引き込みと、脱カルトとは、ともにネットワーク動作の問題として考えるべきである。事例Yで示したとおり、入信から脱会に至る全体の過程をトリオンのダイナミクスとしてとらえることができる。図9には、脱会におけるトリオン・パターンを示している。

図9 脱会のトリオン・シフト



注：中央の大きなマルの三角形は、オブジェクトワールドのトライアドを表す。サブワールドの小さなマルの三角形は、主観的世界にくり込まれたトライアド（トリオン）を表している。

E : 子どものサブワールド (脱会)

- (1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「信仰ひとすじ！」
 (2)[P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)「2つの愛の葛藤…」
 (3a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)「騙されてた！」
 (3b)[P:C E、N:P E、N:P C](PNN安定)「肉の親より霊の親！」
 (3c)[P:E C、N:P E、N:P C](PNN安定)「信仰ひとすじ！」

入信においてカルトと家族の間で引き裂かれる不安定状態から、カルトを選んだ子どもは、(1)[P:E C、N:E P、N:P C]でトリオン構成が安定する。この回路で荷重ループがまわると、家族からますます離れて、カルトに強くコミットするようになる。

しかし、親からの愛情(+ W:P E)を受けると、(2)[P:E C、P:P E、N:P C]のPが2個の不安定なトリオン・パターンに陥る。神への愛(+ W:E C)あるいは神からの愛(+ W:C E)と、親からの愛(+ W:P E)の間で、荷重量の大小をめぐる振動が発生する。子どもの主観的意味世界においては、信仰の揺らぎとして経験されるだろう。もし、親からの愛(+ W:P E)が、神への愛(+ W:E C)あるいは神からの愛(+ W:C E)よりわずかでも上回るならば、その微小荷重の差異がトリオンのフィードバック・ループをまわること増幅され、(3a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)に移行する。カルトの愛(+ W:C E)よりも、本物の家族の愛(+ W:P E)の備給量が大きいと、Nが2個で安定するトリオン荷重演算論理に基づいて、P:C EからN:C Eへとシフトし、安定パターンに向かうからである。

信者を脱会させるためにおこなわれる救出カウンセリングは、カルトから子どもを物理的に引き離して「保護」し、家族とつきっきりの密な生活を送ることで、神への愛(+ W:E C)、神からの愛(+ W:C E)のリアリティを遮断し、一方的に親からの愛(+ W:P E)を送り込むための戦略として有効性をもっている。「保護」された現場で、信仰を失いたくない子どもが神への「祈り」を欠かさないのは、神への愛(+ W:E C)、神からの愛(+ W:C E)の荷重備給によって、信仰のリアリティを主観的意味世界につなぎとめておくための、唯一可能な手段である。

親の愛(+ W:P E)よりも、神への愛(+ W:E C)あるいは神からの愛(+ W:C E)が上回る場合、トリオン・パターンは、(3b)[P:C E、N:P E、N:P C](PNN安定)へとシフトして安定する。「肉の家族」よりも「霊の家族」が優先される。この回路は、(3c)[P:E C、N:P E、N:P C](PNN安定)と連動することで、いっそう家族から

の離脱とカルトへのコミットメントが促進される。

P: 親のサブワールド(脱会)

(1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「親を棄てて信仰の道に...」

(2a)[P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)「愛しているのに...」

(2b)[P:E C、P:E P、N:P C](PPN不安定)「本当は親を愛してるはず...」

(3a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)「騙されている!」

(3b)[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)「本物の信仰ではないはず!」

子どもが家族を離れてカルトに入ったという現実に対して、親は納得できない。(1)[P:E C、N:E P、N:P C](PPP)で安定するが、子どもに対する愛情があるかぎり、(2a)[P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)のリアリティは維持される。親が子どもを愛していて、カルトを嫌っているのに、子どもがカルトに惹かれるという状態は、トリオン回路の感情論理として不安定である。自分の愛する者が、自分の憎む者に惹かれるのは理不尽だと感じられるのである。

さらに、親のPPN不安定パターンは、(2b)[P:E C、P:E P、N:P C]のPPN不安定パターンとも連動する。親の主観的意味世界において、親に対する子どもの負の荷重+W:E Pが振り込まれると、トリオン・パターンは不安定になる。家族を離れてカルトに入ったが、本当は親を嫌っているのではないはずと信じるからである。

二重のPPN不安定回路から、安定したトリオン構成へのパターン・シフトとして、子どもはカルトに騙されているという(3a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)が可能である。子どもに対する親の愛(P:P E)とカルトへの憎しみ(N:P C)の組み合わせは、トリオン回路の感情論理として、カルトが子どもを騙しているという負の荷重-W:C Eを発生させやすい。カルトの愛は偽物で、本当の愛は生まれた家族の愛であるという、救出カウンセリングの主張は、このトリオン動作に根ざしている。

カルトの愛が偽物と考え、子どもは騙されているだけだから、マインド・コントロールを解いてやれば、ふたたびカルトを去って親のもとに戻るはずと考えられる。(3b)[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)へのシフトが親の願いになる。N:C Eの裏面として、N:E Cが親の主観的意味世界のトリオン構成に生まれる。子どものカルトへの信仰は、本物の信仰ではなくマインド・コントロールされているだけだという救出カウンセリングの論理は、このトリオン動作による。

親子間の関係は、2者間の荷重動作（くり込まれたダイアッド=ダイオン）としても見ることができる²⁸⁾。親は、子どもに対して愛情を注いでいるのに、子どもからの愛情が返ってこない、感情的不安定を経験する [P:P E、N:E P]、子どもからの親への負の荷重振り込みN:E Pの背後に、カルトのマインド・コントロールがあると想定することにより、ダイオンでの不安定さがトリオンとしての安定回路に変換される。親から見た三角形の対辺にあたる子どもとカルトの関係に、N:C Eの陰謀を見いだすのである。さらに、その裏面としてN:E Cの荷重回路も構成される。この回路に荷重が備給されることで、親のサブワールドにおいて、子どもは心の底からカルトに惹かれているのではないというリアリティが生成される。

(3a)[N:C E、P:P E、N:P C](NPN安定)と(3b)[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)のトリオン・パターンで荷重回路がまわり出すと、子どもがカルトに騙されてマインド・コントロールされているという図式がリアリティを帯びる。そのため、親は、なんとしても子どもを救出しなければならないと感じる。そして、実際にオブジェクト・レベルで救出に向けて動き出すこともある。

C: カルトのサブワールド(脱会)

- (1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)「信仰ひとすじ！」
- (2)[P:E C、P:E P、N:P C](PPN不安定)「2つの愛の葛藤…」
- (3)[P:C E、N:P E、N:C P](PNN安定)「肉の親より霊の親！」

信者を家族から引き離して、カルトにつなぎとめている状態は、(1)[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)である。ここで、カルト信者である子どもが親への愛情(+ W:E P)を備給すると、カルトの意味世界でのトリオンは、(2)[P:E C、P:E P、N:P C]のPPN不安定パターンに移る。信仰の論理からいうと、家族は俗世のしがらみの最たるものであり、信仰に生きる者は家族的なしがらみからの離脱を必要とする。キリスト教にも仏教にもみられる出家者の論理は、(3)[P:C E、N:P E、N:C P](PNN安定)というトリオン・パターンに由来する。親を断ち切ってこそ、聖なるものへの崇拝がリアルになるのである。聖なるもののエネルギーは、俗なるものからの離脱によって養われる。

28) ダイアッドにおける自他の主観的世界(ソシオンの第2階層)にマッピングされた2者関係のモデルを、ソシオン理論では「ダイオン(dyon)」と呼ぶ。木村によると、「ダイオンは、自他の荷重変化をモニターしながら、その変化量を反対称にあるいは対称に変換することで、他方の荷重変化について、ありうるもしくはあるべき予期を第2階層で形成する」[木村 2000:82]

4.5 二世信者におけるトリオン・シフト

ここまで、入信、家族伝道、脱会それぞれのパターンを検討してきた。その際、カルトと親の関係は、初期条件として、基本的に互いに負の荷重を振り込みあう関係(N:C P)として固定して考えることができた。カルトというレッテルが否定的な含意をもつことから、カルトに対する家族の不信(N:P C)はトリオン構成において固定される。また、カルトは家族から子どもを引き離して入信させるから、家族は信仰の妨げになるものとして負の荷重増分-W:C Pが振り込まれる。

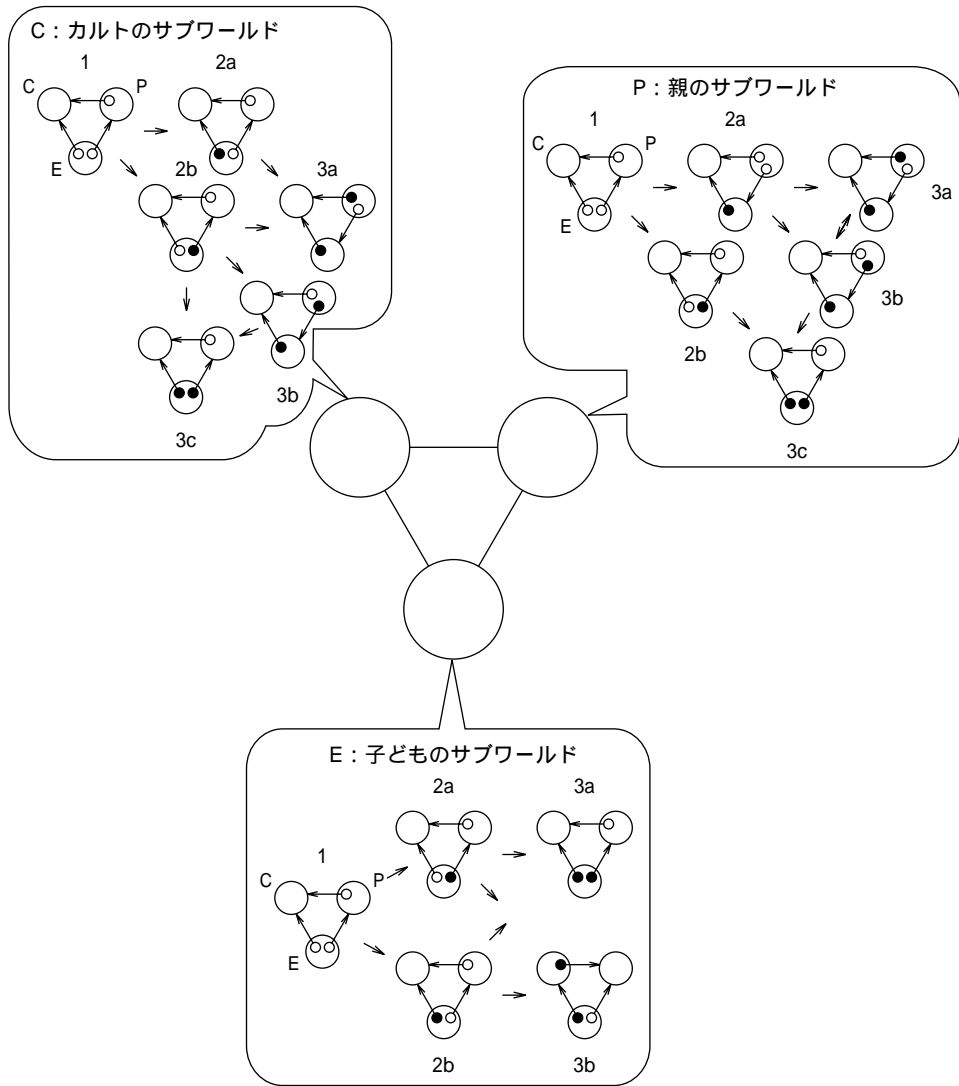
ところで、二世信者の場合には事態はまったく逆になる。初期条件は親が信仰している状態なので、カルトと親の間に正の荷重関係(P:C P)の存在を固定して考えることができる。図10には脱会におけるトリオン・パターンを表している。

E: 子どものサブワールド(二世信者)

- (1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)「家の宗教」
- (2a)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)「反抗期」
- (2b)[N:E C、P:E P、P:P C](NPP不安定)「カルト嫌い！」
- (3a)[N:E C、N:E P、P:P C](NNP安定)「親もカルトも嫌い！」「家出！」
- (3b)[N:E C、P:E P、N:C P](NPN安定)「親は騙されてる！」

さて、子どもの主観的意味世界において、家族全員で信仰している状態のトリオン構成は、(1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)である。カルト信仰が「家の宗教」化している状態である。子どもの成長にともない、不安定が発生する2つの可能性がある。ひとつは、子どもが反抗期に入って、親に対する負の荷重-W:E Pを備給するケースで、トリオンは、(2a)[P:E C、N:E P、P:P C]のPNP不安定になる。カルトの信仰はもつが、同じくカルトを信仰する親に対しては、負の感情を抱いている。P2個の不安定パターンである。もうひとつの可能性は、親に対しては正の荷重関係P:E Pであるが、カルトの信仰に対して疑問をもち、カルトへの不信-W:E Cが備給されるケースである。子どものサブワールドにおけるトリオンは、(2b)[N:E C、P:E P、P:P C]のNPP不安定になる。カルトは嫌いだが、親は好きである。しかし、親はカルトにコミットしているため、トリオン論理からいうとP2個で不安定である。

図10 二世信者のトリオン・シフト



注：中央の大きなマルの三角形は、オブジェクトワールドのトライアッドを表す。サブワールドの小さなマルの三角形は、主観の世界にくり込まれたトライアッド（トリオン）を表している。

安定したトリオン・パターンへのシフトとして、(3a)[N:E C、N:E P、P:P C] (NNP安定)になる可能性がある。親とカルトの両方に対して負の荷重を備給することで、トリオンが安定する。

あるいは、カルトへの反感から、親はカルトに騙されていると考えるかもしれない。(3b)[N:E C、P:E P、N:C P](NPN安定)への移行である。親を騙しているという負の荷重- W:C Pをカルトの側に備給することで、トリオンは安定する。しかし、このトリオン構成は、親のサブワールドにおけるトリオンとの間にズレを生じるから、親子間での葛藤は避けられないだろう。

P: 親のサブワールド(二世信者)

- (1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)「家の宗教」
- (2a)[N:E C、P:P E、P:P C](NPP不安定)「子どものカルト離れ」
- (2b)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)「反抗期」
- (3a)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)「信仰足りない!」
- (3b)[N:E C、N:P E、P:P C](NNP安定)「愛が足りない!」
- (3c)[N:E C、N:E P、P:P C](NNP安定)「親離れ」「カルト離れ」

子どもがカルトへの反感をもつと、親のサブワールドでのトリオン構成は、(1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)から(2a)[N:E C、P:P E、P:P C](NPP不安定)へと移行する。子どもとカルトの間がうまくいかないことで、親は苦悩する。あるいは、子どもがカルトへの信仰をもったままで親に対して反抗するようになると、(2b)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)の状態になる。このトリオン・パターンも親のサブワールドでは不安定であり、安定パターンへとシフトする動力となる。

子どもがカルトへの信仰をなくしたケースで、親から子どもへの愛情(+ W:P E)の備給量が大きいとき、親は自分の信仰が足りないから子どもがカルトを離れたと考えるかもしれない。親が自分の不信仰を責める(3a)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)のパターンである。

親が自責するもうひとつのパターンとして、親のサブワールドでのトリオンは(3b)[N:E C、N:P E、P:P C](NNP安定)に移行する可能性がある。子どもに対する自分の愛情が足りないと親が自責することで、トリオンは安定する。

子どもが親もカルトもどちらも嫌いになったと親が考えると、(3c)[N:E C、N:E P、P:P C]のNNP安定になる。親離れ・子離れのパターンであり、ひとつの安定型である。

C : カルトのサブワールド (二世信者)

- (1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)「家の宗教」
- (2a)[N:E C、P:E P、P:P C](NPP不安定)「信仰継承の失敗」
- (2b)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)「反抗期」
- (3a)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)「信仰足りない!」「甘やかし!」
- (3b)[N:E C、N:P E、P:P C](NNP安定)「愛が足りない!」
- (3c)[N:E C、N:E P、P:P C](NNP安定)「親離れ」「カルト離れ」

(1)[P:E C、P:E P、P:P C](PPP安定)は、家族がひとつの信仰共同体になっているトリオン・パターンである。子どもがカルトの信仰から離れていく(2a)[N:E C、P:E P、P:P C](NPP不安定)のパターンと、子どもが親に反抗する(2b)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)は、カルトの信仰継承として重大な問題である。信仰の継承が失敗するのは、子どもがカルトから離れる場合と、子どもの親離れがカルトからの離脱につながる場合の両方の可能性がある。カルトでは、(3c)[N:E C、N:E P、P:P C](NNP安定)で信仰が途切れることを避けたいから、(2a)[N:E C、P:E P、P:P C](NPP不安定)と(2b)[P:E C、N:E P、P:P C](PNP不安定)の不安定からのシフトとして、親の不信を責める(3a)[N:E C、P:P E、N:P C](NPN安定)と、子どもに対する親の愛情不足を責める(3b)[N:E C、N:P E、P:P C](NNP安定)のトリオン・パターンを構成する。しかし、(3a)と(3b)いずれの戦略も、それ自体としては子どものカルトに対する負の荷重関係N:E Cを変化させることができない。トリオンの論理からいっても、多くのカルトが教団ライフサイクルの過程で直面する信仰継承問題が解決困難であることがわかる。

4.6 ソシオ・ブリッジ

親・子・カルトの3者関係において、入信、家族伝道、脱会、二世信者のトリオン・シフトを検討すると、3項間でつねに固定的にロックした固定関係と、比較的動かしやすい可変関係があることがわかる。親から子どもへの正の荷重振り込み(P:P E)や、二世信者をのぞくケースでのカルトに対する親からの負の荷重振り込み(N:P C)は、ロックした固定関係である。固定関係には、親とカルトの対立関係(N:P C)のように、双方向的なものと、親から子どもへの一方的な愛情の振り込み(P:P C)のように一方向的なものがある。親は子どもからの負の荷重を備給された場合でも、積極的に子どもに対し

て負の荷重を振り込むことはしにくい。それゆえ、負の双方向的な固定関係にはなりにくいだろう。

これに対して、親から見た子どもとカルトの関係や、カルトから見た親と子どもの関係は、可変関係になりやすい。その理由は、3者がつくる三角形の位置関係から考えるとわかりやすい。任意の頂点から見た三角形の対辺(他者と他者との関係)は、直接的には検証不可能な領域にある。陰謀説や妄想の発生とおそらく深くかかわっているであろうこの1辺をソシオ・ブリッジ(socio-bridge)と呼ぶ。ソシオ・ブリッジは、トリオンの対角に位置する個人に対して「外部」として現れる。

ソシオ・ブリッジは、社会の生成にかかわる重要な社会学的意義をもつ概念である。ゲオルク・ジンメルは、関係の消滅という観点から、2者関係と3者関係の決定的な違いを指摘し、社会の原型が3者関係にあることを示した。2者関係において1人抜けると関係は消滅するが、3者関係においては1人抜けても、まだ関係が存続する。つまり、3者関係においてはじめて個人的な要素を超えた高次の統一体が生まれるのである[Simmel 1908 = 1994a:92-95]、「私」がいなくても社会(関係)は確かに存在し続ける。「私」にわたっての他者と他者との関係が存在するとき、社会ができるといってもよい。社会関係の基底は、自己と他者との関係ではなくて、他者と他者との関係と考えられる²⁹⁾。

直接検証不可能というソシオ・ブリッジの特性は、負の荷重動作によって不安や恐れを生みだすもとにもなるが、正の荷重動作による願望の投影も可能にする。したがって、ソシオ・ブリッジは、荷重変換の自由度が比較的高いと推測できる。トリオンの不安定パターンから安定パターンへの最短経路のシフトとして、ソシオ・ブリッジの変換が合理的になる。ただし、サブワールドのトリオン構成におけるソシオ・ブリッジの変換が、オブジェクト・レベルでのトリオンから著しく乖離した状態は、妄想と呼ばれるだろう。

「肉の親より霊の親」というカルトの神学的命題や、「子どもたちはカルトに騙されてマインド・コントロールされている」というマインド・コントロール論は、特定のソシオ・ブリッジ変換に対応した表現になっている。たとえば、「肉の親の愛より霊の親の愛の方が強い」というカルトの神学的命題は、カルトのサブワールドにおける、[P:E C、P:P E、N:P C](PPN不安定)から[P:E C、N:P E、N:P C](PNN安定)へのトリオ

29) 個人意識に対する社会的事実の外在性を強調したデュルケームは、同時に、「社会は人間の意識に場所を占めるかぎりにおいてのみ、実在性をもつのである」[Durkheim 1912 = 1975b:204]とも述べている。これは、ソシオ・ブリッジとしての社会と考えるとわかりやすい。第2階層にくり込まれたトライアドであるトリオンは、個人の意識内にもみ存在するものであるが、トリオンのソシオ・ブリッジは、対角にあたる自己からは直接検証不可能な「外部」として表象される。これがデュルケームのいう「個人表象」と「集合表象」の質的な違いであると考えられる。デュルケームは、集合表象が道徳的な力をもつことを指摘している。

ン・シフトに由来する。子どもが親の愛とカルトの愛の間で葛藤するPPN不安定の状況で、子どもをカルトへ導いてループを安定させる操作が必要となる。親の愛情 (P:P E) とカルトの愛情 (P:C E) の比較考量において、 $+ W:C E > + W:P E$ へと水路づける神学的表現が「肉の親より霊の親」という命題である。 $+ W:C E > + W:P E$ で荷重がまわり出すと、トリオン・ロジックとして、相対的に備給される荷重増分の小さい $+ W:P C$ は、安定ループへの傾斜により $- W:P C$ に取り代わる。カルトから見て、ソシオ・ブリッジにあたる親と子の関係は、当初P:P Eであったが、トリオンの不安定パターンであるため、ソシオ・ブリッジの変換が起こる。P:P Eは「肉の親の愛情」として価値低下し、N:P Eとして荷重が備給される。

マインド・コントロール論は、親のサブワールドにおける、[P:E C、P:P E、N:P C] (PPN不安定) から [N:E C、P:P E、N:P C] (NPN安定) へのトリオン・シフトに基づく。トリオン・ロジックとして、P:P EとN:P Cの組み合わせの帰結がN:E Cになると安定する。親から見てソシオ・ブリッジにあたる子どもとカルトの関係は、P:E Cだと安定しないから、親のサブワールドのトリオンにおいて、N:E Cに変換される。これが、子どもは騙されているというマインド・コントロール論のトリオン・ロジック的根拠になっている。

ソシオ・ブリッジの変換は、それぞれのサブワールド内でのトリオン安定をもたらすロジックであるが、同時に3者それぞれのサブワールド間のズレをもたらす可能性がある。たとえば、親は子どもがマインド・コントロールされていると見るのに対して、子どもは真剣に信仰していると感じている。事例Yが示すとおり、サブワールド間のズレは、「くり出し」によってオブジェクト・レベルでの相互作用を展開する動力になる。

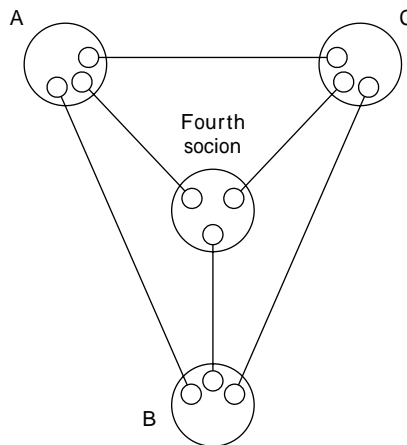
4.7 フォース・ソシオン

トリオン・シフトのパターン決定は、不安定な揺らぎのなかに発生する微小荷重の向き、順序によると考えられる。誰に対して荷重が備給されるか、また同じ荷重量であっても、時間的に先行するかどうかによって結果は正反対になるかもしれない。安定したトリオン回路では、相互増幅的フィードバック・ループによって、最初はわずかな揺らぎだったものが、やがては堅固なリアリティとしての強さをもつようになるからである。

トリオンのシフトを見きわめる際に大切なのは、不安定なトリオンをどの方向に水路づけるかということである。不安定なトリオンを方向づける上で、第4項 = フォース・ソシオン (fourth socion) の介入が鍵となる。

トリオンに第4項が介入することによって、合計4個のトリオンができる（図11）。このトリオン複合（trion complex）内での荷重動作は、4個のトリオンがそれぞれ重なり合う部分をもつことから、必然的にトリオン間（inter-trion）での荷重動作に連動する。それゆえ、どこか1点での荷重勾配の微小変化も、他のトリオンすべてに影響して、全体のトリオン複合をダイナミックに変化させる。これが、第4項の力である。

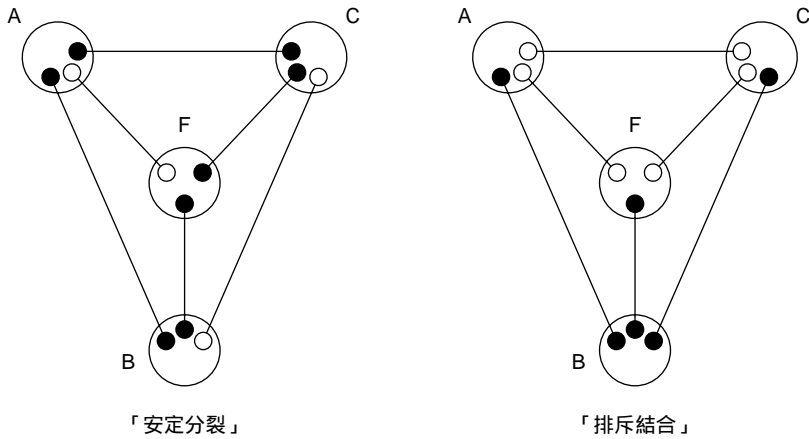
図11 トリオン複合



トリオンのネットワークは、選択的荷重動作の多重未決定性に起因する揺らぎや振動によって、パターン・シフトを展開する。トリオン複合それぞれのループがN結合2個で安定すると、ロックしてしまい、容易には関係の結び目がほどけなくなる。N結合1個で不安定なときは、荷重の勾配にしたがって、安定ループへとシフトする。フォース・ソシオンの介入は、安定したトリオンに対しては、ロックした結び目に楔を打ち込み、固着した関係を新たなダイナミクスへと駆動する。また、不安定なトリオンに対しては、荷重勾配の天秤を傾けることで、安定ループへと導く可能性がある。

すべてのトリオンでN2個かP3個の安定ループが形成されるとき、4個のトリオンが強固にインターロックする。インターロックのパターンとして、4項が2対2に分かれる「安定分裂」と、4項が3対1に分かれる「排斥結合」がある（図12）。インターロックしたトリオン複合は、対立闘争を内包しつつも、全体として安定した荷重ループを形成する。信頼と不信、愛情と憎しみの相互媒介増幅のネットワークである。

図12 安定分裂と排斥結合



注：組み合わせパターンは「安定分裂」で3通り、「排斥結合」で4通りある。

フォース・ソシオンの介入は、必ずしも強いベクトルをもつ必要はない。フォース・ソシオンの働きは、振動している不安定トリオンにわずかな力を加えることで安定へと向かうシステム・ダイナミクスを引き起こすことである。最初の一押しは、ごくわずかな力でもかまわない。フォース・ソシオンは微小荷重のスイッチャーとしての役割を果たせば十分なのである。トリオンのシステムにおいては、最初の微小荷重の差異が荷重ループ回路をまわることで加速し、結果として大きな変化を生み出す。ほんの偶然的「出会い」が、その後の運命を大きく変えてしまうのである。

ネットワークの運動は、3者関係(トリオン)に介入する第4項(フォース・ソシオン)にかかっている。したがって、社会関係への介入とは、2者関係への介入ではなく、3者関係への介入である。この意味でも、社会の基底は2者関係ではなく3者関係にある。

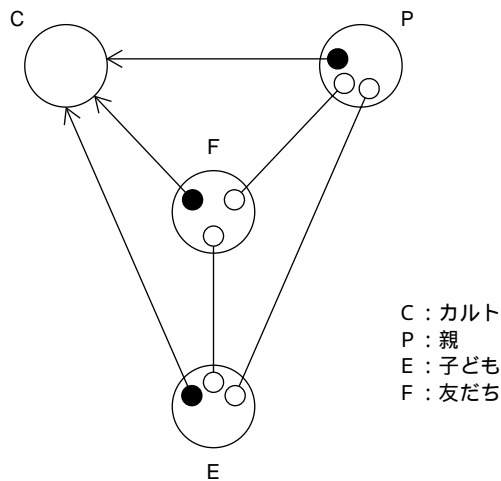
カルトの事例に即して考えると、たとえば子どものサブワールドで、入信時の不安定パターン[P:E C、P:E P、N:P C]が構成されたとする。入信の安定パターン[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)にシフトするか、入信しないで家族のもとに戻る安定パターン[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)にシフトするかの決定は、最初の不安定状態におけるカルトへの正の荷重P:E Cと家族への正の荷重P:E Pの量的比較による。

特定の時点で備給される荷重増分において、わずかでも、 $+ W:E C > + W:E P$ で

あれば入信に傾きやすくなる。荷重増分の差によって+ W:E Pが相対化され、家族に対する負の荷重- W:E Pとして経験される。このループがまわると、[P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定)にシフトする。反対に、+ W:E C < + W:E Pであれば、入信にいたらず、[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)にシフトするだろう。

+ W:E Cと+ W:E Pの量的差異は、当初は微小なものであるから、つねに場面ごとに揺らいでいると考えられる。フォース・ソシオンが効果を発揮するのはこのときである。たとえば、カルトと親の間で引き裂かれた子どもが、信頼する友人に相談したとしよう。もしその友人が、カルトに否定的な印象をもっていれば、本人のカルトに対する荷重も負の方向に引っぱられる。カルトへの正の荷重備給+ W:E Cが減少し、- W:E Cが備給される。そうすると、カルトに反対する家族への正の荷重備給+ W:E Pは、トリオン回路の論理として増大する。結果として、トリオンは[N:E C、P:E P、N:P C](NPN安定)のパターンにシフトする。カルトを排斥する「排斥結合」である(図13)。カルトに対して批判的なマスメディアの情報なども、このパターンでのフォース・ソシオンとして機能する。

図13 カルト入信失敗のトリオン複合



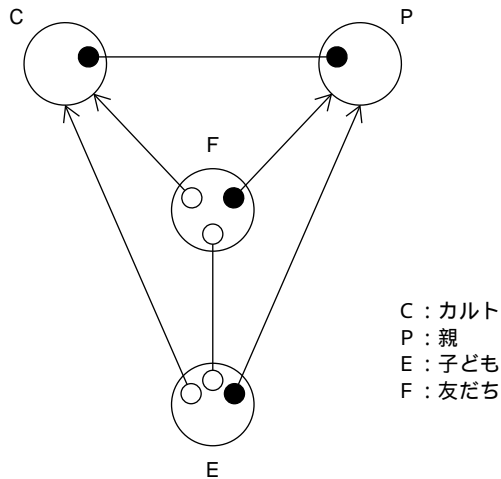
反対に、信頼する友人が家族に対して好ましくない印象をもっていたなら、家族に対して負の荷重- W:F Pが備給される。子どもと友人、家族の3者関係は、トリオン論理にしたがって、[P:E F、N:F P、N:E P](PNN安定)で安定する。親に対する負の荷重

- W:E Pは、親・子・カルトのトリオンに作用するから、結果として入信のトリオン・パターン [P:E C、N:E P、N:P C](PNN安定) にシフトする(図14)。親を排斥する「排斥結合」である。

統一教会の入信勧誘システムでは、被勧誘者は最初ビデオセンターに通っていることを親や友人に隠しておくように指導される。「黙止行」と呼ばれ、よいことは人に言いふらさずにおこなうべきという道德実践である。この「黙止行」によって、親・子・カルトのトリオンへの第4項の介入がコントロールされる。きょうだいや友人など教団外の者の介入を排除して、信者を第4項として介入させる。図14のフォース・ソシオンが教団信者のケースと考えるとよい。実際、新しく入った被勧誘者を信仰上の先輩に紹介することはよくおこなわれる。「あなたにぜひ会わせたい人がいます。とても信心深いりっぱな方ですよ」といって紹介される信者仲間が、フォース・ソシオンの役割を担う。

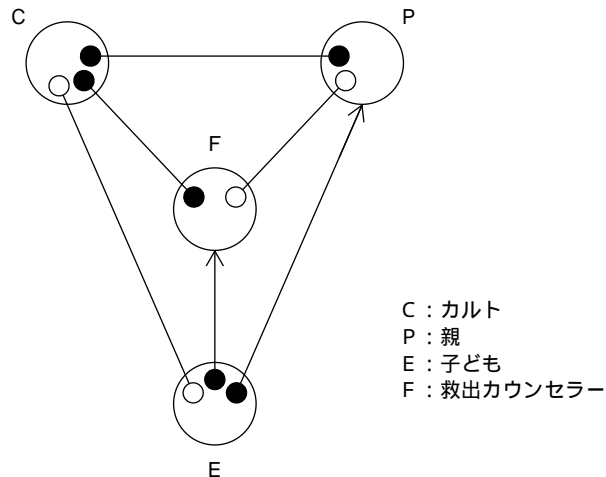
フォース・ソシオンのコントロールは、救出カウンセリングにおいても用いられる戦略である³⁰⁾。図15は、救出カウンセラーがフォース・ソシオンとして介入した状態を表す。

図14 カルト入信成功のトリオン複合



30) 救出カウンセリングの方法も、かなり組織化されている。家族の勉強会への参加 マンションへの保護 家族による話し合い 救出カウンセラーによる説得 「原理」の間違いを認めて脱会 リハビリテーションとして聖書の勉強や他の信者の説得を手伝う。ほとんどの場合、この手続きを踏んで脱会する。この手続きはたぶん経験的に確立されたものであるが、ソシオン理論の視座から見ると、フォース・ソシオンのコントロールをはじめとしてきわめて有効なソシオン・ネットワーク戦略が採用されている。

図15 救出カウンセリングのトリオン複合（1）



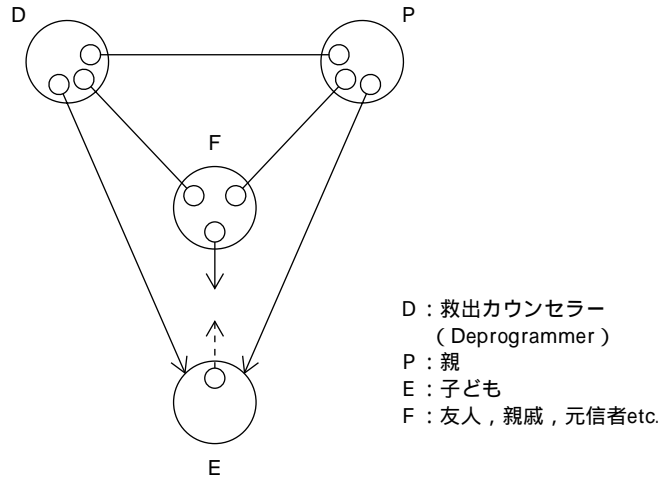
カルトでは、救出カウンセラーは信仰を妨げようとするサタンの手先とされる。だから、最初の時点では、C-E連合（カルト-子ども連合）とP-F連合（親-救出カウンセラー連合）の「安定分裂」として全体がインターロックする。「安定分裂」(C-E P-F)では、子どもを脱会させようとして親と救出カウンセラーがカルトを批判すればするほど、子どもはますますカルトへの依存を強めるという構造になっている。図15に示したとおり、N2個で安定するトリオンの荷重演算論理により、C-E連合とP-F連合の対立は安定するのであり、還流する荷重量の増大によってトリオン・ロックはきつく締まる。

そこで、P-F連合がとる戦略が「保護」である。「保護」は、子どもを物理的にカルトから引き離す環境に置いて説得するという、脱マインド・コントロール方法である。C-E連合とP-F連合が対峙する「安定分裂」(C-E P-F)のときに、ともかく子どもをカルトから隔離した状況に置く。「保護」したマンションには、説得者として救出カウンセラーの他に本人の友だちや恩師、親戚のおじさん、おばさん、いとこ、元信者などいろいろな人たちがやってきて、脱会するよう説得する。「保護」でのトリオン複合は、カルトを外して、親、子、救出カウンセラーのトリオンに、フォース・ソシオンとして友人や親戚、元信者などがつぎつぎと介入するというトリオン複合になる（図16）。

救出カウンセリングのトリオン複合では、友人や親戚のフォース・ソシオンへの子どもの信頼（+ W:E F）をてこにして、救出カウンセラーへの信頼（+ W:E D）、親への信頼（+ W:E P）が醸成される。そして、親と救出カウンセラーへの信頼は、親、子、

救出カウンセラー、カルトのトリオン複合にフィードバックされ、カルト不信（- W:E C）へと水路づけられる。カルトに対して3項から負が振り込まれる「排斥結合」のインターロックが成立すれば、救出は成功するだろう。

図16 救出カウンセリングのトリオン複合（2）



トリオン複合において、4者が2組に分かれて対抗関係を結ぶことで全体が安定する「安定分裂」と、1項を排斥することで3項が連帯し全体としても安定する「排斥結合」は、「闘争は社会化の形式である」というジンメルの命題をソシオン理論的に定式化したものである。

人びとのあいだのあらゆる相互作用が社会化であるとするれば、闘争はともかくもっともなまなましい相互作用のひとつであり、個々の要素に限定すれば論理的には不可能であるから、あくまでも社会化とみなされなければならない。[Simmel 1908 = 1994a:262]

ジンメルのいう「社会化」は、社会的結合の形成（社会関係の成立）を意味するから、闘争は社会関係を形成する方法ということである。社会は統一だけからなるのではない。社会の形成には闘争が積極的な意義をもつことをジンメルは強調する。

ある集団がたんに求心的・調和的であり、たんなる「結合」に過ぎないとすれば、それはたんに経験的に非現実的であるのみではなく、またけっして本来の生過程を示さないであろう。ダンテが楽園のバラのなかに認めた聖者の社会は、そのような状態で

あったかもしれないが、しかしそれはまたいかなる変化と発展をも欠いていたであろう。ところがラファエロの 論議 のなかの教父たちの聖なる集合は、現実の争いとしてではないが、なお情緒と思考方向とのいちじるしい多様性として描かれ、この多様性からかの会合のまったく生き生きとした性格と真に有機的な関連とが湧きでている。宇宙がひとつの形式をもつためには「愛情と憎悪」、牽引力と反発力を必要とするように、社会もまた一定の形式に達するためには、調和と不調和、結合と競争、好悪と悪意のなにほどかの量的な割合を必要とする。しかしこれらの分裂はけっしてたんなる社会学的な負債、否定的な事例ではなく、ために決定的な現実の社会は、たんに積極的な別の社会諸力によってのみ、しかも分裂に妨げられないかぎりにおいてのみ成り立つのではない。この通俗的な見解はまったく皮相的である。社会はそれが存在しているように、相互作用の二つのカテゴリーの結果であり、そのかぎり両者はまったく積極的にあらわれる。[Simmel 1908 = 1994a:263-264]

たんに調和だけから成り立つ社会よりも、敵対と闘争を含む社会の方が生き生きとした全体性をもつ。ジンメルという社会的統一とは、個々の要素の調和を指すのではなく、分裂や闘争を部分に含む「究極的なそれらの全体」[*ibid.*:265] を指している。

ソシオン理論の仮説によると、社会ネットワークは荷重の還流＝ループとして形成される。荷重には、「期待」を生むプラスの予期ポテンシャル（ポジオン）と、「怯え」をもたらすマイナスの予期ポテンシャル（ネクロン）とがある³¹⁾。愛と信頼のネットワーク（ポジオン・ネットワーク）だけではなく、憎しみと不信のネットワーク（ネクロン・ネットワーク）も全体社会の積極的な構成要素になる。それぞれのトリオンにおける信頼と不信の安定ループ（NNP結合、NPN結合、PNN結合）が組み合わさって全体としてのトリオン複合がインターロックする「安定分裂」と「排斥結合」は、ジンメルが見いだした闘争の社会化形式の具体的な中身といえる。

P3個かN2個で安定するトリオン・ロジックから考えると、4個のトリオンすべてがPPP結合で幸福な信頼ネットワークが成り立つことも理論的には可能である。だが現実的には、Nを含む「安定分裂」か「排斥結合」のトリオン・インターロックが社会構成のパターンとして一般的と考えられる。ジンメルの示唆するところによると、既存の社会関係

31) ポジオンは、「なにかいいこと（吉）」の予期ポテンシャルを生成し、ネクロンは「なにかわるいこと（凶）」の予期をもたらす。ポジオン/ネクロンという対概念の命名について、木村は、「ポジオンは人を陽気にして元気を与える元なので、陽元（子）と呼んでもいいし、ネクロンはその逆の陰気や邪気、悪気などの元なので、隠元（子）と称してもよかったかもしれない」[木村 2000:114] と述べている。ポジオン (posion) はpositive、ネクロン (necron) はnegativeあるいはnecrosisを連想させる含みがある。

に介入して信頼か不信のどちらかを植えつけようとするなら、不信の方が信頼を作り出すよりも容易であるという。トリオン・ネットワークのダイナミックスの鍵を握るフォース・ソシオンは、正の荷重よりも負の荷重を送り込むことに長けているのかもしれない。ジンメルはつぎのように述べている。

一般に普通の人間が他者に、これまでは無関心であった第三者へまさにこのような信頼と愛好の感情を注入することは、不信と嫌悪の感情を注入するよりもはるかに困難である。ここでとくに独特と思われることは、この相違がとりわけ相対的に顕著であるのは不信と嫌悪の低い程度と、だれかにたいする賛成か反対かの気分と先入見の最初の萌芽とが問題になる場合である。そのばあい実際へと導くより高い程度において事を決するのは、基礎本能をもたらず右のはかない性癖ではもはやなく、むしろ意識された考慮である。たんに方向は異なるが同じ基本的な事実を示すのは、他者についてのわれわれの形像をあたかも影のようにかすめるかのかすかな偏見が、まったく無関係な人びとによっても暗示されることもありうるが、これにたいし好意的な先入観はすでに権威ある誘発者、あるいは情緒的に親しい誘発者をも必要とするということである。[Simmel 1908 = 1994a:276-277]

社会関係への介入においては、信頼よりも不信を生み出す方がたやすいとジンメルはいう。確かに、カルトの勧誘に比べて救出カウンセリングの成功率は高い。教祖を信仰させるよりも、教祖を信じられなくする方が成功しやすいようである³²⁾。

フォース・ソシオンの介入は、ネットワークの「つぼ」を押しして新たな変動をもたらす。変化を予測してフォース・ソシオンを介入させることは、ポリティクス始まりである。4個のトリオンのインターロックとして、カルトをめぐるネットワークは微妙な荷重勾配に揺らぎながら「うねり」を反復していくのである³³⁾。

32) もちろん、カルトの勧誘が不特定多数を対象としたものであるのに対して、救出カウンセリングは特定の1個人を対象としたものであるから、1人あたりにかけるコストの違いが成功率の差を生むことは、まず間違いない。とはいえ、それでもやはり信頼よりは不信を生む方が簡単だと推測する根拠はある。ロバート・リフトンが調査した中国共産党の強制収容所の事例では、アメリカ人捕虜に対してひとり当たり相当なコストをかけて「洗脳」が施されたにもかかわらず、本国に帰還してしばらくすると、転向者たちは元のイデオロギーを取り戻したのである[Lifton 1961 = 1979]。これに比べると、救出カウンセリングによる「脱マインド・コントロール」の成功率は驚くほどである。クラークらは、アメリカでの救出カウンセリングの成功率を約90パーセントと見積もっている[Clark et al. 1993:163]

33) ネットワークの「うねり」のひとつの帰結が、一連のオウム真理教事件であったことを木村洋二は指摘している。第47回関西社会学会報告「オウム真理教への一視点」(1996年5月)参照。

5 結び

以上、カルト宗教の入信、家族伝道、脱会、二世信者といったさまざまな現象について、ソシオン理論によって分析した。カルトの入信勧誘過程は、荷重のシャドー・オペレーションを利用した帰還不能点累積システムとしてとらえることができる。帰還不能点累積システムにおいては、もう後には戻れないという「痛み」の予期ポテンシャルが、人を希望と絶望に閉じたセミオス(宗教的意味システム)へつなぎとめる。

帰還不能点累積システムという「仕掛け」に人びとを駆り立てたり引き離したりするネットワーク・ダイナミクスは、トリオンのモデルを使って分析できる。事例Yの検討から、トリオンのパターン・シフトとフォース・ソシオンの介入が、カルトをめぐるネットワーク・ダイナミクスにおいて重要であることがわかった。子どものカルト入信をめぐるカルトと家族の対立(あるいは、より根源的な宗教と家族の対立と葛藤)について、本稿の分析は、親・子・カルトのトライアドが、ソシオン理論によって明確に定式化できることをあきらかにした。従来の社会心理学的マインド・コントロール論や社会学的入信段階図式では十分にとらえられなかった、カルトをめぐるネットワーク・ダイナミクスは、ソシオン・ネットワーク分析によって説明可能である。

ソシオン理論によるカルトの分析によって、思考の道具としてのソシオン理論が、実証的データの分析の道具としても有効であることを十分に示せたのではないだろうか。ソシオン・ネットワーク分析は、込みいったカルト現象を読み解くツールになりそうである。ソシオグラフを用いた事例Yの記述は、モノグラフにおけるソシオ的記述の可能性を開く。「吹きだし」を用いたトリオグラフは、親・子・カルトそれぞれの主観的意味世界の対応とズレが一目で分かる、すぐれた情報圧縮能力をもつ。トリオグラフによる聞き取り調査データの整理・分析は、ソシオン理論に基づく社会調査法の構想につながるものである。また、トリオンに介入するフォース・ソシオンや、トリオンにおける他者と他者の関係を指すソシオ・ブリッジの概念は、事例分析から彫琢されたものであり、個別フィールドへの応用がソシオン理論の発展に貢献できることもわかった。

ソシオン理論の根本原理である荷重ループによるリアリティ生成と「くり込み」「くり出し」による多重階層交叉にもとづく思考法は、個別フィールドでの事例分析にも十分に使える分析の道具を提供する。カルト宗教のように、主観的意味世界間のズレが顕著な現象(ポリティクスの発生する場)の分析においては、とくに有効なツールになる。カルト研究とソシオン一般理論の展開の両方において、フォース・ソシオンの介入によるソシオ

ン・ポリティクスの分析が、今後の課題となるだろう。

参考文献

- Bainbridge, William 1997 *The Sociology of Religious Movements*, Routledge
- Bataille, Georges 1976 *Théorie de la religion, Euvres complètes, tome VII*, Gallimard (湯浅博雄訳 1985『宗教の理論』人文書院)
- Bateson, Gregory and Jurgen Ruesch 1968 *Communication : The Social Matrix of Psychiatry*, W.W.Norton (佐藤悦子・R.ポスパーグ訳 1995『精神のコミュニケーション』新思索社)
- 1965
(川端香男里訳 1973『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房)
- Beckford, James 1978 "Accounting for Conversion", *British Journal of Sociology* 29(2):249-262
- 1985 *Cult Controversies : The Societal Responses to the New Religious Movements*, Tavistock
- Bunyan, John 1685 *The Pilgrim's Progress from this World to that which Is to Come, Delivered under Similitude of a Dream wherein Is Discovered the Manner of His Setting Out, His Dangerous Journey : And Safe Arrival at the Desired Country* (大久保康雄訳 1949『天路歷程』風間書房)
- Caillois, Roger 1964 *Instincts et Société : Essais de sociologie contemporaine*, Editions Gonthier (野村二郎・中原好文 1990『本能 その社会学的考察』思索社)
- Clark, David, Carol Giambalvo, Noel Giambalvo, Kevin Garvey, Michael D. Langone 1993 "Exit-Counseling : A Practical Overview", M. D. Langone ed. *Recovery from Cults : Help for Victims of Psychological and Spiritual Abuse*, W. W. Norton : 155-180
- Deleuze, Gilles 1968 *Différence et Répétition*, Presses Universitaires de France (財津理訳 1992『差異と反復』河出書房新社)
- Durkheim, Emile 1912 *Les formes élémentaires de la vie religieuse. Le système totémique en Australie*, Quadrige. 1994 (古野清人訳 1975a, 1975b『宗教生活の原初形態(上・下)』岩波書店)
- Festinger, Leon 1957 *A Theory of Cognitive Dissonance*, Row, Peterson (末永俊郎他訳 1965『認知的不協和の理論 社会心理学序説』誠信書房)
- Freud, Sigmund 1921 *Massenpsychologie und Ich-Analyse* (小此木啓吾訳 1970『集団心理学と自我の分析』井村恒郎・小此木啓吾他訳『フロイト著作集 6 自我論・不安本能論』人文書院 : 195-253)
- 1923 *Das Ich und das Es* (小此木啓吾訳 1970『自我とエス』井村恒郎・小此木啓吾他訳『フロイト著作集 6 自我論・不安本能論』人文書院 : 263-299)

親・子・カルトのトライアド(木村・渡邊)

- 1933 *Noue Folge der Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse* (懸田克躬・高橋義孝訳
1971「精神分析入門(続)」懸田克躬・高橋義孝訳『フロイト著作集1 精神分析入門(正・続)』
人文書院:387-536)
- Gergen, Kenneth 1994 *Toward Transformation in Social Knowledge, 2nd Edition*, Sage Publications (杉万俊
夫・矢守克也・渥美公秀訳 1998『もう一つの社会心理学 社会行動学の転換に向けて』ナカニ
シヤ出版)
- 橋爪大三郎 1986『仏教の言説戦略』勁草書房
- Hassan, Steven 1988 *Combating Cult Mind Control*, Park Street Press (浅見定雄訳 1993『マインド・コント
ロールの恐怖』恒友出版)
- Heider, Fritz 1958 *The Psychology of Interpersonal Relations*, Wiley (大橋正夫訳 1978『対人関係の心理学』
誠信書房)
- Hexham, Irving and Karla Poewe 1997 *New Religions as Global Cultures*, Westview Press
- Hick, John 1990 *Philosophy of Religion, fourth edition*, Prentice Hall (間瀬啓允・稲垣久和訳 1994『宗教の哲
学』勁草書房)
- 井門富士夫 1997『現代の宗教15 カルトの諸相』岩波書店
- 伊藤雅之 1997「入信の社会学」『社会学評論』48(2):158-176
- 木村洋二 1983『笑いの社会学』世界思想社
- 1993「欲望のソシオン理論 ソシオンダイアドにおける差異と欲望の力学と感情のキュー
ブモデル」『関西大学社会学部紀要』第25巻第2号:1-41
- 1995a『視線と『私』 鏡像のネットワークとしての社会』弘文堂
- 1995b「『私』の構成 自己システムのソシオン・モデル」井上俊・上野千鶴子・大澤真
幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学2 自我・主体・アイデンティティ』岩波書店:
69-83
- 1996「ソシオンとコミュニケーション ソシオグラフとソシオマトリックスに見るコミュニ
ケーションと相互主観性の多重構造」『関西大学社会学部紀要』第27巻第3号:155-178
- 1999「ソシオンの一般理論(I)」『関西大学社会学部紀要』第30巻第3号:65-126
- 2000「ソシオンの一般理論(II)」『関西大学社会学部紀要』第31巻第2・3合併号:63-149
- Lacan, Jacques 1981 *Le Séminaire, Livre III : Psychoses, Texte établi par Jacques-Alain Miller*, Seuil (小出浩
之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳 1987a,1987b『精神病(上・下)』岩波書店)
- Lifton, Robert 1961 *Thought Reform and the Psychology of Totalism : A Study of "Brainwashing" in China*,
W.W.Norton (小野泰博訳 1979『思考改造の心理』誠信書房)

- Lofland, John and Rodney Stark 1965 "Becoming A World-Saver : A Theory of Conversion to A Deviant Perspective", *American Sociological Review*, 30 : 862-875
- Luhmann, Niklas 1973 *Vertrauen : Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität, 2. erweiterte Auflage*, Ferdinand Enke Verlag (大庭健・正村俊之訳 1990 『信頼 社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房)
- Mauss, Marcel and Henri Hubert 1899 "Essai sur la nature et la fonction du sacrifice", *L'Anée sociologique* 2 (小関藤一郎訳 1983 『供犠』法政大学出版局)
- 村上春樹 1998 『約束された場所で underground 2』文藝春秋
- 中野毅 1997 「反カルト運動とアメリカ・ナショナリズム」中野毅・飯田剛史・山中弘編 『宗教とナショナリズム』世界思想社 : 95-123
- 西田公昭 1993 「ピリーの形成と変化の機制についての研究(3) カルト・マインド・コントロールにみるピリー・システム変容過程」『社会心理学研究』第9巻第2号 : 131-144
1995a 『マインド・コントロールとは何か』紀伊國屋書店
1995b 「ピリーの形成と変化の機制についての研究(4) カルト・マインド・コントロールにみるピリー・システムの強化・維持の分析」『社会心理学研究』第11巻第1号 : 18-29
- 大村英昭 1994 「空転する世界 システム外無根拠性ということ」林敏彦・大村英昭編 『文明としてのネットワーク』NTT出版 : 101-144
1996 「『拡散宗教』とネットワーク型組織」『組織科学』vol.29, No.4 : 47-53
- 作田啓一 1993 『生成の社会学をめざして 価値観と性格』有斐閣
- 青春を返せ裁判(東京)原告団・弁護団 2000 『青春を奪った統一協会 青春を返せ裁判(東京)の記録』緑風出版
- 世界基督教統一神霊協会伝道教育局 1994 『原理講論 三色刷』光言社
- 芹沢俊介 1985 『「イエスの方舟」論』春秋社
- Simmel, George 1908 *Soziologie*, Duncker & Humblot (居安正訳 1994a, 1994b 『社会学(上・下)』白水社)
- Singer, Margaret and Janja Lalich 1995 *Cults in Our Midst : The Hidden Menace in Our Everyday Lives*, Jossey-Bass (中村保男訳 1995 『カルト』飛鳥新社)
- 氏族メシア勝利マニュアル編纂委員会 1996 『氏族メシア勝利マニュアル・パート1』光言社
- 杉本誠/名古屋 『青春を返せ訴訟』弁護団 1993 『統一協会信者を救え 杉本牧師の証言』緑風出版
- Tabor, James and Eugene Gallagher 1995 *Why Waco? : Cults and the Battle for Religious Freedom in America*, University of California Press
- 高尾利数 1996 『イエスとは誰か』日本放送出版協会

親・子・カルトのトライアド(木村・渡邊)

- 植島啓司 1998 『宗教学講義 いったい教授と女生徒のあいだに何が起こったのか』筑摩書房
- 魚谷俊輔 1999 『統一教会の検証』光言社
- Wach, Joachim 1958 *The Comparative Study of Religions*, Columbia University Press (渡辺学・保呂篤彦・奥山倫明訳 1999 『宗教の比較研究』法藏館)
- 渡邊太 2000 「カルト信者の救出 統一教会脱会者の『安住しえない境地』」『年報人間科学』第21号: 225-241
- Weber, Max 1921-1922 *Wirtschaft und Gesellschaft*, Verlag von J.C.B. Mohr, Tübingen (阿閉吉男・内藤莞爾訳 1968 『社会学の基礎概念』角川文庫(改版))
- 山口広 1993 『検証・統一協会 靈感商法の実態』緑風出版
- 吉本隆明 1982 『論註と喩』言叢社
- Žižek, Slavoj 1989 *The Sublime of Ideology*, Verso (鈴木晶訳 2000 『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社)

2001. 1. 15 受稿